Artists and Geibun Project 2021

武蔵野美術大学 芸術文化学科

活動実績報告書

目次

01 主催者挨拶……03
02 プロジェクト概要……04
・概要 / 意義 / 実施背景
・アーティストの活動
・学生の活動
03 展覧会開催概要……07
04 展覧会構成……08
・展示室「作品と出会う場」
・展示室「アーティストと出会う場」
・ガラスドローイング「交差する場」
05 展覧会公式関連プログラム……11
・クロストーク「表現の歩み」
・芸文生が語る展覧会ウラ話
・十人十色ギャラリーツアー
・中国語ツアー
06 地域との繋がり……12
・あおぞら保育園オンラインギャラリーツアー
・国立青柳中央会オンラインギャラリーツアー
07 広報・プロモーション……14
・制作物
・web、SNS、メディア露出
・特典企画 / 展覧会オリジナルグッズ
08 展覧会評価……20
・展覧会評価 1- 来場者
・展覧会評価 2- 参加者
・展覧会評価 3- アーティスト
・展覧会評価 4- 活動参加学生
09 今後の活動……42

01 主催者挨拶

「歩く–感覚と思考の交差点–」展は、コロナ禍をきっかけに出会った齊藤彩と中屋敷智生という二人のアーティストと、武蔵野美術大学芸術文化学科有志学生 10 名が作り上げた展覧会です。日々歩きながら、思考し、作品を生み出しているアーティストたち。そして、この展覧会を生み出した学生一人一人の歩み。そこから導き出された「歩く」がテーマである本展では、三つの会場で展示を行い、それぞれ異なる視点から、彼らの創作活動の歩みを捉えます。

芸術文化学科のギャラリースペース apmg では、「作品と出会う場」として、二人がこれまでに制作した作品に加え、「歩く」という言葉に触発され生み出した新作を展示します。彼らが日々の生活の中で積み重ねてきた「身体感覚」や「記憶」に基づく多彩な表現をご覧ください。
普段ゼミ室として使っている空間は「アーティストと出会う場」となります。二人のドローイングや子ども時代の作品、使用している画材、また制作プロセスを記録した映像や年表などを通し、アーティストの歩みと制作の裏側を網羅的に体感できる初めての機会を提供します。
そして、9 号館 1 階ゼロスペースに設けた「交差する場」では、二人が協働して生み出したガラスドローイングや、展覧会の歩みをまとめたパネルや記録映像を通し、この展覧会が育んできた、新たな関係を可視化します。

今回の展示を通し、今を生きるアーティストが、日常生活を送りながら、何を見つめ、何を目指し、作品を生み出してきたのかを、感じ、思考する機会を提供できればと考えています。ゆっくりと会場を歩き、巡りながら「歩く」の世界をお楽しみください。

最後になりましたが、本展に参画していただきましたアーティスト、本展のためにご助言、ご指導をいただきました多数のみなさま、また有形無形のご支援をいただきました個人、企業、団体の皆様にも、心より御礼申し上げます。

2021 年 4 月
Artists and Geibun Project 2021

02 プロジェクト概要

【プロジェクト概要】
プロジェクト名：Artists and Geibun Project 2021
活動期間：2020 年 9 月 13 日 (日)〜2021 年 7 月 17 日 (土)
参加人数：13 名（運営スタッフ含め 34 名）
活動：「アートと社会を繋ぐデザイン」を学ぶ武蔵野美術大学芸術文化学科の有志学生 10 名が芸術文化学科教授の杉浦幸子監修のもと、2 人の現代アーティストと共に実践的に展覧会を企画・運営するプロジェクト。

【プロジェクト意義】
武蔵野美術大学で、理論と実践をベースに「アートと社会をつなぐ」デザインを学ぶ芸術文化学科の学生が、コロナ禍という特異な 状況の中で、東京と京都をつなぐ展覧会の企画・運営をオフライン、オンライン両方で主体的に行うことで、次の 3 点の意義を見出す。
1. 来場者が作品鑑賞やワークショップへの参加を通して、造形における新たな発見を得る
2. 企画実施を行なっている学生がマネジメントやコトづくりに関して実践的な学びを得られる
3. 参加アーティストが展覧会を体験する様々な人々、そして展覧会を企画実施する学生と関わることによって、社会とのつながりを感じ、制作への刺激を受けられる

【実施背景】
〈新型コロナウィルス流行によるオンライン授業〉
　2020 年に芸術文化学科の授業として実施予定だった「Grass×Geibun Project」（通称”GGP”。同校工芸工業デザイン学科ガラス専攻の学生と芸術文化学科学生が共に展覧会を作り上げるプロジェクト）が、新型コロナウィルスの流行により、学外で活動する現役アーティストと学生がリモートで共に展覧会を企画する内容に変更され、2020 年 5 月〜8 月までオンライン授業として実施された。
　オンライン授業では受講生 26 名が 5 チームに分かれ、中間発表やアーティストとの交流を重ねながら企画をつくり、最終的にはアーティストと杉浦先生に向けて展覧会の企画プレゼンテーションを行なった。
　その後、2020 年 9 月〜2021 年 5 月にかけては、５つの案からプレゼンテーションで選ばれた展覧会企画「歩く - 感覚と思考の交差点」を土台とし、有志学生 10 名が中心となり課外活動として展覧会を実現するための実践的な企画・運営に取り組んだ。

〈コロナ禍におけるアーティストの参加〉
　横浜を拠点に活動する齊藤彩は、2020 年 4 月に予定していた女子美術大学ガレリアニケでの展覧会が新型コロナウィルスの影響で中止となったことをきっかけに、展覧会関連プログラムに協力していた杉浦から声をかけられ、参加する事となった。
　またもう 1 人の参加アーティスト、京都を拠点に活動する中屋敷智生は、コロナ禍の制作活動「送りドローイング Exibition 2020」(安倍政府がコロナ対策としてマスク２枚を配布する中、マスクと同じサイズのドローイング２枚を家に届けるプロジェクト）を通じて、以前より別のプロジェクトで協同していた杉浦と関わりを持っていたことから、本プロジェクトへの参加に至った。

【アーティストの活動概要】

◆参加アーティスト　齊藤彩 / 中屋敷智生
◆AGP 活動期間　　2020 年 4 月〜2021 年 7 月
◆主な活動

2020 年 4 月〜8 月	オンラインミーティング オンライン授業参加 企画案選定
2020 年 8 月〜2021 年 3 月	オンラインミーティング 展覧会の為の新作制作 新作制作映像の制作 武蔵美来校
2021 年 4 月〜5 月	作品搬入・搬出 展示設営作業 ガラスドローイング制作
2021 年 7 月以降 (未定)	活動振り返り

【アーティスト経歴】
◆齊藤 彩　SAITO Aya
1981 年東京生まれ。
2003 年女子美術大学洋画専攻卒業。
横浜を拠点に精力的に制作を行う齊藤は、「話さないより、絵を描かないほうがつらい」と毎日必ず一点以上の作品を描き続けています。2015 年にはドイツに滞在し、教会の壁に絵を描くワークショップに参加。これまで生み出した作品数は数百点にも上り、言葉では説明できない表現に対する情熱を、等身大の白紙、白いキャンバス、さらにはホットプレートの蓋、電気のかさや衝立といった日常の小物にまでまっすぐにぶつけています。
主な展覧会 ...「カラーイメージングコンテスト 2008 受賞作品展」（スパイラルガーデン、2008)、「トーキョーワンダーウォール 2013」（東京都現代美術館、2013)、「だるまさんがころんだ」（MEGUMI OGITA GALLERY、2017）など

◆中屋敷 智生　NAKAYASHIKI Tomonar
1977 年大阪府生まれ。
2000 年京都精華大学美術学部造形学科洋画分野卒業。
京都を中心に各地で活躍の場を広げる中屋敷は、自分の目で見た光景をもとに記憶をたどり、物語性や意図を排除した場面を取捨選択して描きます。「遠近法」や「光」を軸に、空間上のヒエラルキーを解体し、色を等価に配置することで、「網膜像的視覚」と「知覚像的視覚」が表裏一体となった、余白のある空間を模索しています。拾ってきた木材に絵の具を流す技法を施した彫刻作品シリーズ《Dororo》は、絵画の延長上にあり、中屋敷ならではの表現を追求しています。2020 年 4 月には、日本政府が全世帯に布マスクを配布する中、マスクと同サイズのドローイング 2 枚を送り鑑賞してもらう郵送展覧会「おくり Drawing Exhibition 2020」を行いました。
主な展覧会 ...「永遠のパースペクティブ」（KOKI ARTS、2018)、「Identity XIV - curated by Mizuki Endo - 水平線効果 -」（nca | nichido contemporary art、2018）など

【学生の活動概要】

◆参加学生　　コアスタッフ　10 名
　　運営スタッフ　21 名
　　AGP 受講生　　26 名（2020 年 4 月〜8 月の授業受講生）
◆AGP 活動期間　コアスタッフ　2020 年 4 月〜2021 年 7 月
　　運営スタッフ　2021 年 3 月〜2021 年 5 月
　　AGP 受講生　　2020 年 4 月〜2020 年 8 月
◆主な活動

2020 年 4 月〜8 月	オンラインミーティング オンライン授業 企画書作成・発表
2020 年 8 月〜2021 年 3 月	展覧会企画・準備 (詳細は「活動の足跡」参照)
2021 年 4 月〜5 月	作品搬入・搬出 展示設営作業 展覧会運営
2021 年 7 月以降（未定）	活動振り返り

プロジェクトアーカイブ「活動の足跡」
https://sites.google.com/view/agp2021/ 活動の足跡 ?authuser=0

【参加学生について】
参加学生は 3 種類のスタッフに分かれて活動した。特に展覧会会期中の運営は、芸術文化学科の 1 年生〜院生の有志学生が中心に担った。

◆コアスタッフ…2020 年 8 月からプロジェクトに参加し、中心となって企画・運営を行なった有志学生 10 名。

◆運営スタッフ…主に展覧会会期中の運営補助（会場受付、展示作業補助、プログラム補助）を行なった芸術文化学科の有志学生 21 名。

◆AGP 受講生…2020 年 4 月〜8 月の授業で、5 チームに分かれて企画案作成を行った受講生。

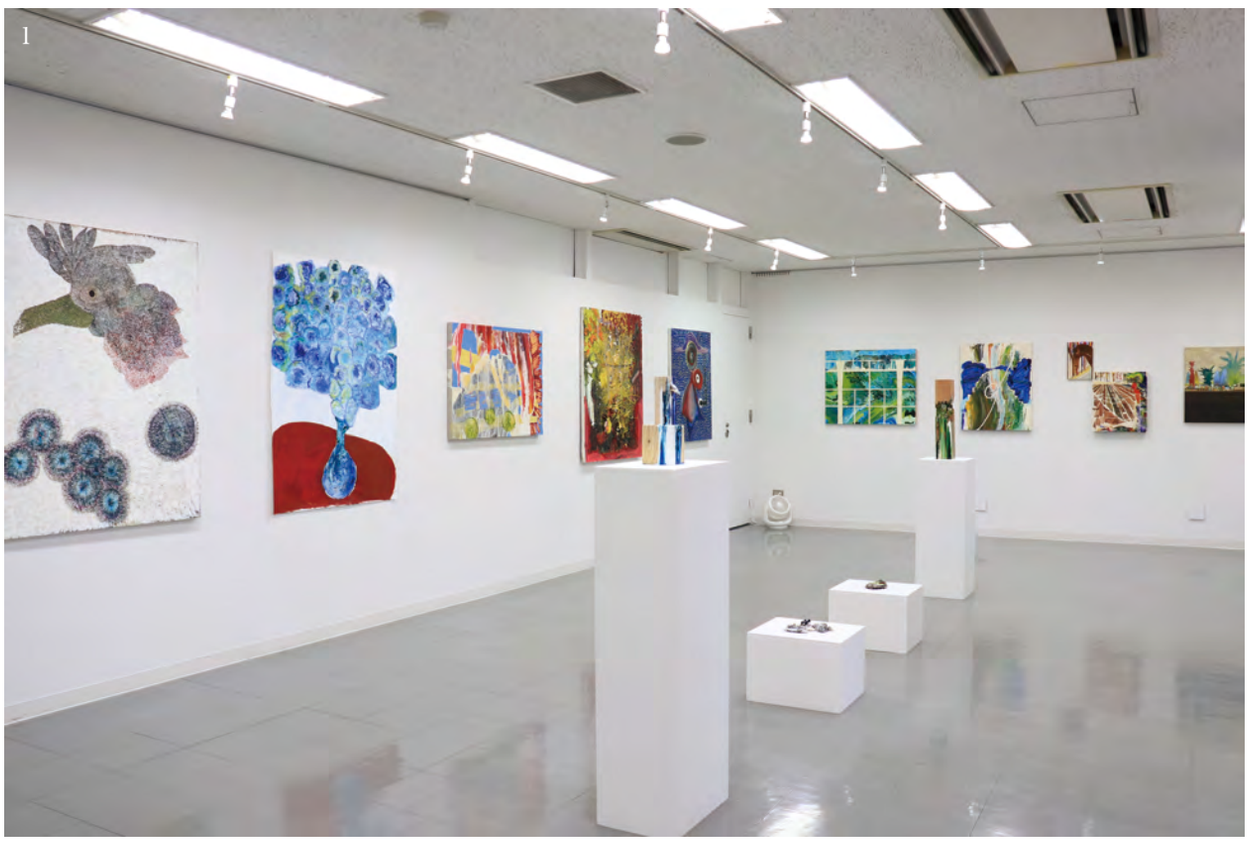
03 展覧会開催概要

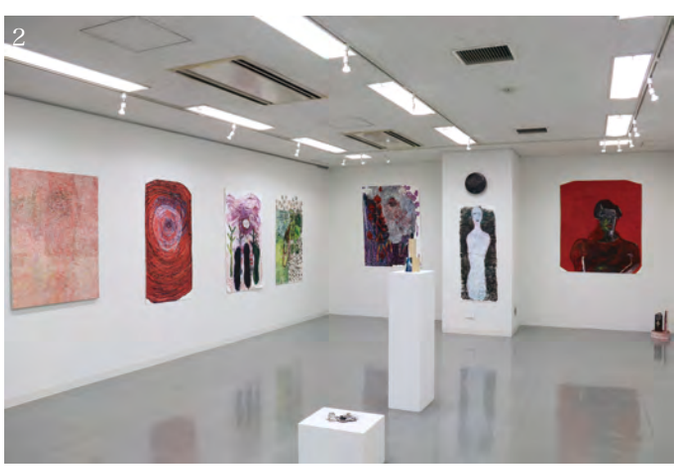
展覧会名	歩く - 感覚と思考の交差点 -
会期	4 月 19 日 (月)〜5 月 8 日 (土) ※緊急事態宣言発令により 5 月 15 日 (土) まで会期延長
休館日	日曜日
開館時間	11:00-17:00
入場料 / 参加料	無料
会場	武蔵野美術大学鷹の台キャンパス 9 号館 6 階 apm ギャラリー、606 教室、1 階ゼロスペース
主催	武蔵野美術大学　芸術文化学科研究室
監修	杉浦 幸子（芸術文化学科教授）
アーティスト	齊藤 彩、中屋敷 智生
企画・運営	武蔵野美術大学芸術文化学科 4 年生有志 〈リーダー〉 大西 瑠夏 〈サブリーダー〉 鈴木 颯良 〈総務・経理・開発班〉 中村 鑑 / 鈴木 颯良 〈展示班〉 チェンウィトン / ユウヒ 〈教育プログラム班〉 白土 若奈 / 宮内 美咲子 〈デザイン班〉 栗原 叶恵 〈広報・記録班〉 長谷川 蘭 / オウキン
助成	一般財団法人さぬき生活文化振興財団
協力	泉里歩 / 今泉和 / 上久保直紀 / ギャルリー宮脇 / 島崎商事有限会社 /Yotta
特別協力	菅原みのり / 米徳 信一
設営協力	楫 義明 / 佐々木 一晋
撮影協力	三澤 一実
運営協力	武蔵野美術大学芸術文化学科有志学生 〈1 年〉安藤梨紗、井澤奏音、小田のどか、川上珠貴、田中荘太、千葉栞、肥田野琴香 〈2 年〉石崎美智、井冨有音、圓城琴音、鈴木藍 〈3 年〉折原彩、加藤ひなの、北田花梨、佐野悠斗、センボウレイ、梨本奈那、若林みちる 〈4 年〉稲葉実夢、平田もも 〈院生〉植松依子

04 展覧会構成

展示室 -apm ギャラリー【作品と出会う場】

齊藤彩、中屋敷智生それぞれの旧作と展覧会テーマ「歩く」をもとに制作された新作を初公開。
アーティストが日々の生活で感じ取った「身体感覚」や日常の中で積み重ねた「記憶」に基づく多彩な作品表現を捉える。

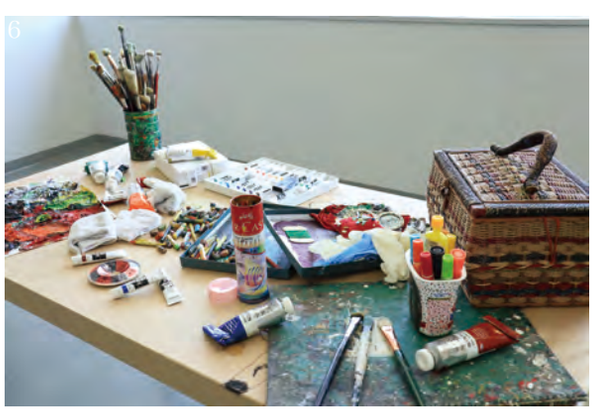


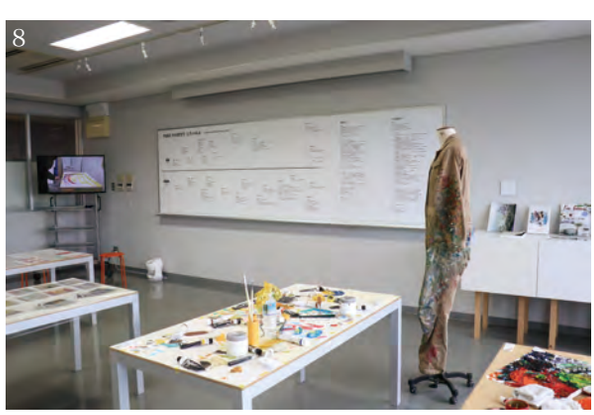


1. 新作が交互に展示された壁面 / 立体作品 / 中屋敷智生の旧作
2. 齊藤彩の旧作 / 立体作品
3. エレベーターホール（受付前）の立体作品展示

展示室 -606 教室【アーティストと出会う場】

ドローイングや学生時代の作品、普段使用している画材を展示し、２人のアーティスト活動を辿る。齊藤彩の子供時代の作品や中屋敷智生の「送りドローイング Exibition2020」の作品、また、本展初公開となる新作の制作風景映像の他、２人のアーティストの歩みがわかる年表、雑誌やカタログ等、制作の裏側に着目した幅広い展示とした。

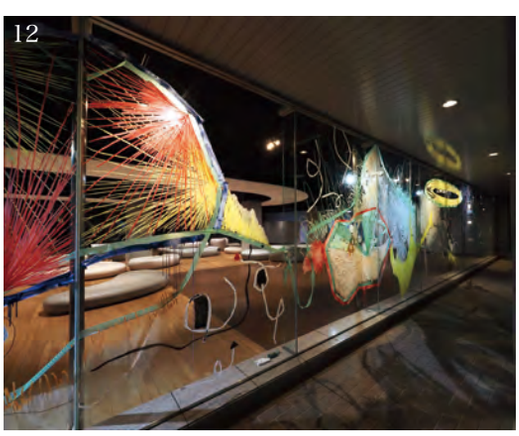


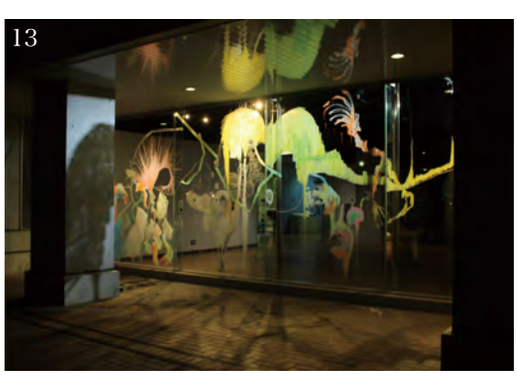


4. 新聞・雑誌の記事 / 送りドローイング紹介 / 画材展示 / 齊藤彩のこども・大学時代のドローイング
5. 中屋敷智生の画材展示
6. 齊藤彩の画材展示
7. 中屋敷智生「送りドローイング Exibition 2020」展示
8. 齊藤彩、中屋敷智生「人生の歩み」年表 / 新作制作風景映像

ガラスドローイング -1 階ゼロスペース【交差する場】

活動の拠点が異なるアーティスト２人はコロナ禍という状況により、展覧会のプレイベントである「ガラスドローイング - 交差する２人の足跡」が初めての出会いとなり、またこのプログラムが初のコラボレーションとなった。制作方法、作品表現の異なる２人のドローイングが、交わりながら大きなガラスを鮮やかに彩った。(4/16(金) 展覧会プレイベントとして開催し、展覧会終了まで公開された)





9. 齊藤彩、中屋敷智生「ガラスドローイング」
10. 中屋敷智生　ガラスドローイング制作風景
11. 齊藤彩　ガラスドローイング制作風景
12、13. 夜のガラスドローイング

05 展覧会公式関連プログラム

◆クロストーク「表現の歩み」

仕事の傍らアーティストとして制作を続け、活動する齊藤彩と中屋敷智生のこれまでの歩みや作品表現について、彼らと学生を繋いだ芸術文化学科教授の杉浦幸子、学生リーダーの大西を交えて語られた。
日時：4 月 19 日（月）17:00~18:30
会場：オンライン

クロストーク「表現の歩み」

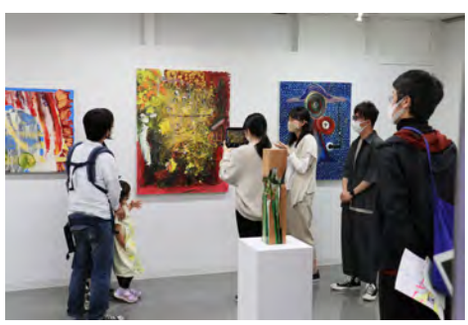
◆芸文生が語る展覧会ウラ話「歩く」ができるまで

展覧会の企画・運営を行った芸術文化学科の学生10 名が、取り組んだことや苦労したことなど、企画のウラ話を語った。
日時：2021 年 4 月 26 日（月）17:00~18:10
会場：オンライン

芸文生が語る展覧会ウラ話「歩く」ができるまで

◆十人十色ギャラリーツアー

展覧会の企画・運営を行った芸術文化学科の学生10 名が、日替わりで展覧会を案内する、オンラインと会場のハイブリッド形式のギャラリーツアーを行なった。
日時：2021 年 4 月 24 日（土）、29 日（木）
5 月 3 日（月）4 日（火）、6 日（木）
各日 12:30-13:00
会場：現地とオンライン


十人十色ギャラリートーク

◆中国語ツアー

展覧会の企画・運営を行った中国、台湾からの留学生が中心となり、アーティストを交えながら中国語のギャラリーツアーを行い、展覧会を海外にまで繋げた。
日時：2021 年 5 月 15 日（土）16:00~17:00
会場：オンライン

中国語ツアー

06 地域との繋がり

【あおぞら保育園オンラインギャラリーツアー】

◆ツアー概要　　羽村市あおぞら保育園の園児、職員に向けた展覧会のオンラインギャラリーツアー

◆実施日　　2021 年 5 月 14 日 (金)16:00-17:00

◆参加人数　　18 名

◆園児たちの感想

①杉浦先生と一緒に学校の中にあった作品を見てどう思った？

・面白かった
・学校すごかった
・一人で描いてるのがすごい
・ひとりであんなに大きな絵を描いて疲れないのかな
・学校で絵を描けるの
・ガラスに絵を描くのがすごかった
・ガラスに描けるクレヨンいいな、欲しい➡園にあるので今度やる約束をしました。
・ガラスに描いてみたい、
・ガラスに絵を描いてもいいの
・テレビの中で絵を描いているところが面白かった色々な色を使っているところ
・18 番の絵の丸い所と水が出ているようなところがよかった。
・５番の絵の色々な色がいっぱいあって奇麗だった
・８番の絵の水色がステキだった
・１番の絵の下の黒があってお水があったのがよかった
・四角い絵がよかった➡立体の作品かもしれません

②みんなそれぞれ気に入った絵があったでしょ。お家に飾ってみたい？

・ほとんどの子が飾りたい

③どこに飾りたい？

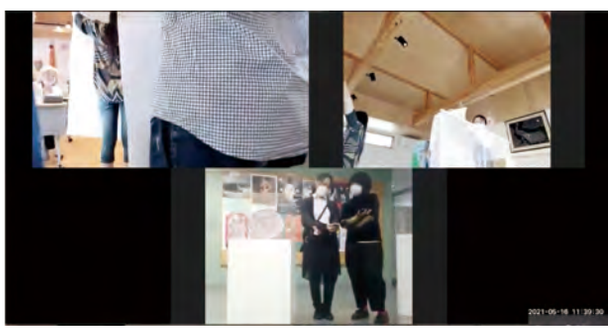
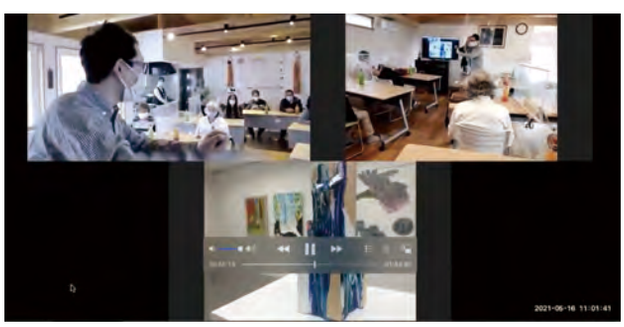
・玄関
・寝る部屋
・階段
・子ども部屋・自分の部屋

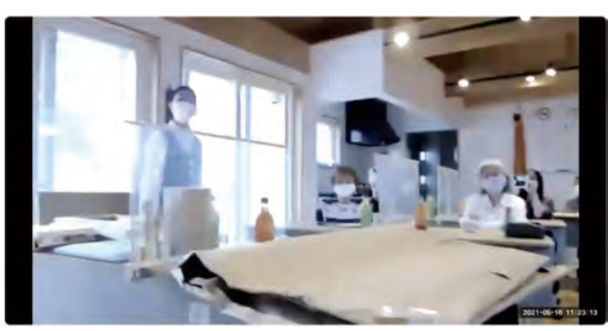
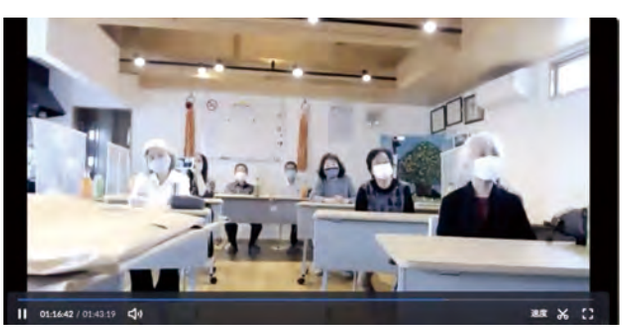
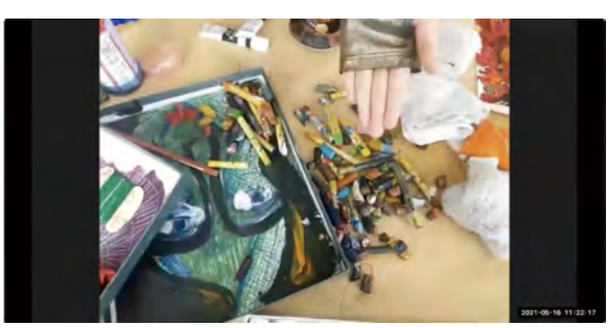
【国立青柳中央会オンラインギャラリーツアー】

◆ツアー概要　武蔵野美術大学で警備員をしている中野英男さんと、中野さんの地元「国立青柳中央会」に向けたオンラインギャラリーツアー
国立青柳中央会にはアーティストである齊藤彩、中屋敷智生とディレクターの杉浦幸子、撮影協力として同学科教授の米徳信一が向かい、展覧会会場では学生が画面越しにツアーを行った。
国立青柳中央会では、実際の作品を見せることもでき、参加者からは感嘆の声があがった。

◆実施日　2021 年 5 月 16 日 (日)10:00-11:00

◆参加人数　11 名

07 広報・プロモーション

【制作物】

◆チラシ、ポスター

デザイン制作　栗原叶恵

齊藤彩、中屋敷智生それぞれのイメージカラーを素朴で温かみのある曲線で表現し、２人の歩みが鮮やかに交わる様子をデザインした。印刷にはやわらかい質感のある里紙、タントの２種類の紙を使用し、展覧会のイメージを表現した。

【チラシ仕様】
A4/ 両面カラー / タント 100kg
4,000 部 / 里紙 100kg　1,000 部

◆展覧会リーフレット

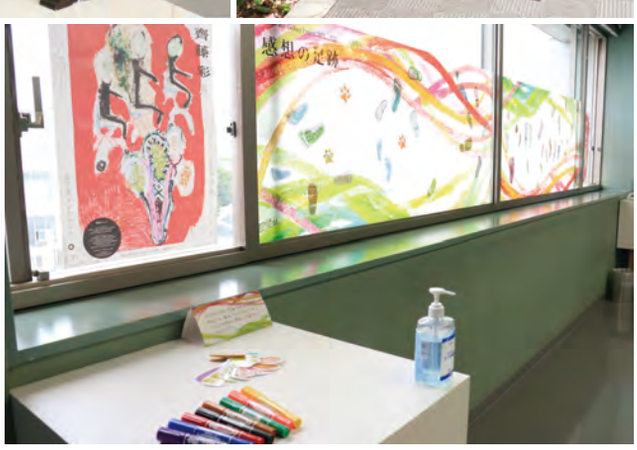
デザイン制作　白土若奈

展覧会の入場者に無料配布するリーフレットは、メインビジュアルを全体に施しながら、開催概要、関連イベント、作品の配置図と作品リスト、アーティスト経歴と主催者挨拶を入れ、関連プログラム「ウォーキングラリー」の台紙とした。

【リーフレット仕様】A3（四つ折り）/ 両面カラー / 上質紙　800 部

◆会場の製作物

1. 壁面 B1 サイン　2. メインビジュアルバナー　3. 階段ライトバナー（バックライトフィルム）　4. スタンプラリー用スタンプ
5. 受付（スカート隠し、メインビジュアルサイン、会場マップ）　6. 屋外アルミスタンド看板　7.「アーティストと出会う場」会場バナー
8.「感想の足跡」台紙（バックライトフィルム）、足跡カード

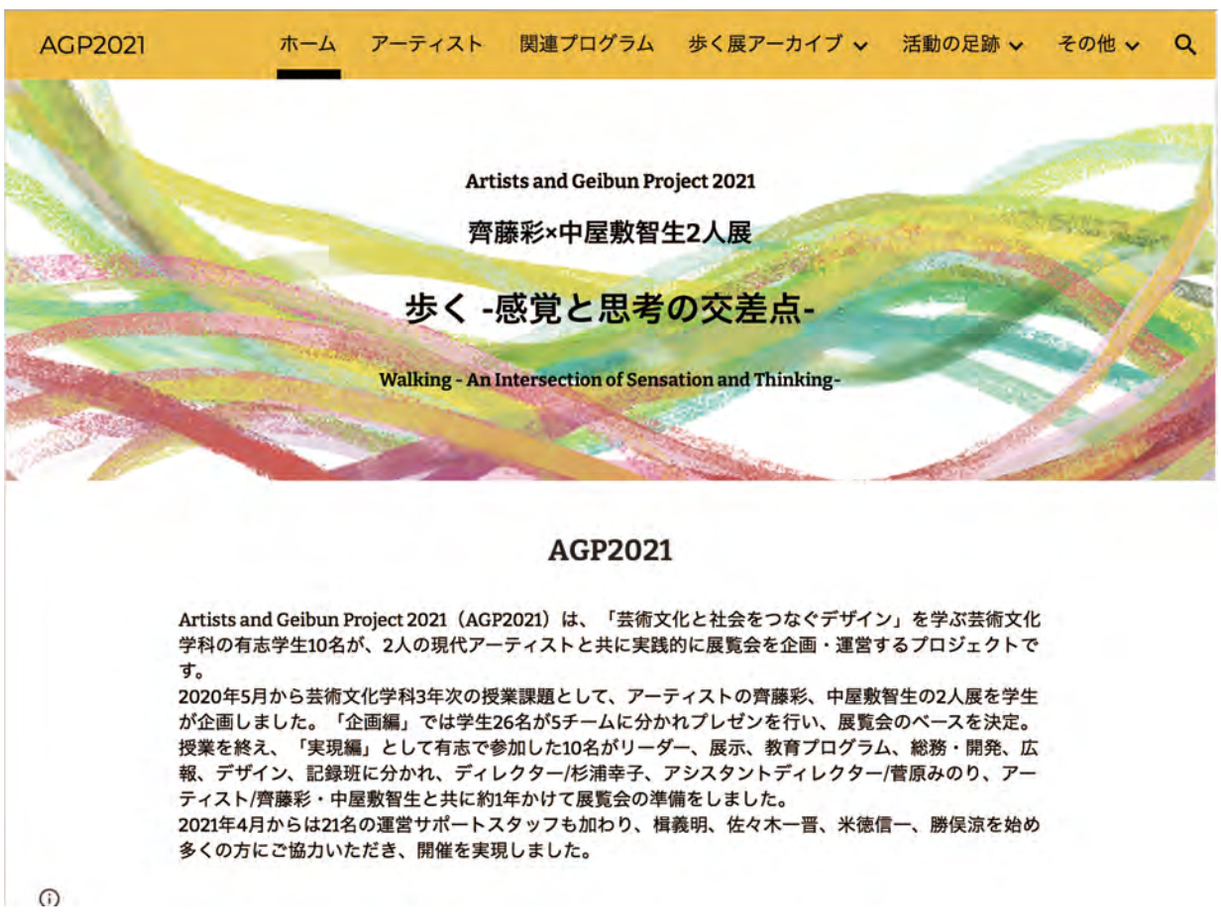


【Web/SNS】

◆公式 Web サイト

展覧会公式 Web サイトを作成し、展覧会の情報を発信するだけでなくイベント申し込みの窓口とした。展覧会終了後はプロジェクトのアーカイブとして機能している。

web サイト URL　https://sites.google.com/view/agp2021/
制作者　長谷川蘭、白土若奈



◆SNS

広報では、facebook、Twitter、Instagram の 3 つの SNS で展覧会情報を発信した。本展は、会期延長やプログラム延長など会期中の変更が多かったため、柔軟な情報発信のため活用した。

facebook

Twitter

Instagram

【広報メディア】

「歩く展」について広報された新聞、雑誌、web サイト、PR イベントは以下の通り。

【新聞 / 雑誌】

◆大学新聞（2021 年 4 月 10 日）

新　聞　令和3年(2021年)4月10日　土曜日　総合　2

「歩く ―感覚と思考の交差点―」

有志学生が企画に参加

武蔵野美術大学

武蔵野美術大学（東京都小平市）芸術文化学科は4月19日～5月8日、鷹の台キャンパスにおいて現代美術家の齊藤彩氏と中屋敷智生氏による展覧会「歩く ―感覚と思考の交差点―」を開催する。コロナ禍の中、コロナ禍をきっかけに出会った齊藤氏と中屋敷氏が、展覧会のタイトルから触発されて制作した新作を展示、表現の全てを通じて、関連プログラムを実施。過去作品をも含む作品使用されたガラスの展示を見ることができる。

開催中は、齊藤氏と中屋敷氏による新作の展示、表現の全てを通じて、関連プログラムを実施。過去作品をも含む作品使用されたガラスの展示を見ることができる。

有志学生らが企画に携わり展覧会の準備を進めた

現代芸術家と作品づくりを行うプログラムも用意

教育連携

草苑学園と協定を締結

青山学院大学

学校法人青山学院（本部東京・渋谷区）は2月4日、学校法人草苑学園（本部東京・豊島区）と「教育提携」に関する協定の調印式を執り行った。

調印式は、大隅刀青山学院宗教部長による祈式のもと執行され、青山学院から加田宣弘理事長、山本与志春院長、阪本浩学長、石橋エリ幼稚園園長、草苑学園から樋口光一理事長および太田園長が参加した。

専門学校（東京都豊島区）の共通ミッションであるキリスト教信仰に基づく教育の一層の充実および発展、ならびに高等教育における連携強化を図ることを目的としている。教育連携の主な内容として、両校の授業の連携や学生・生徒・児童・園児・教職員の交流および研修を挙げており、具体的な内容については、今後協議していく予定となっている。

青山学院大学は、教育方針としてキリスト教信仰に基づく教育を目指し「地の塩、世の光」をスクール・モットーとして、自ら問題を発見し解決する知恵と力を持つ人材育成に努めている。また、人文・社会科学系から自然科学系、理工

◆美術屋百兵衛　2021 年 7 月号

百兵衛TOPICS

展覧会レビュー

Artists and Geibun Project 2021　齊藤彩・中屋敷智生2人展

歩く - 感覚と思考の交差点 -

（作品とにらめる）

常本プログラム（「十人十色ギャラリーツアー」）

ガラスドローイング（立体する場）

武蔵野美術大学鷹の台キャンパスで4月19日（月）～5月15日（土）、「Artists and Geibun Project 2021 齊藤彩×中屋敷智生2人展 歩く ―感覚と思考の交差点―」が開催された。武蔵野美術大学芸術文化学科の学生有志10名がコロナ禍をきっかけに、学科教員である杉浦幸子教授監修のもと、現代アーティストの齊藤彩、中屋敷智生と共に2020年5月から約1年間かけて生み出したものだ。

同展は、作家の旧作から最新作まで幅広く展示した「作品と出会う場」、制作背景やアーティストの歩みを見せる「アーティストと出会う場」、そして、作家2人の初の共同制作となるガラスドローイング「交差する場」という3会場で構成。また、学生とアーティストが連携し、トークやギャラリーツアーなど多数の関連プログラムを実施した。

学生は展示や教育プログラムの計画だけでなく、予算管理から会場運営、開発、広報、記録、デザイン、制作まで、展覧会に関わる企画・運営全てに取り組んだ。会期中に発令された緊急事態宣言の影響を受けながらも、イベントのオンライン化や会期延長など、学生全員で協議柔軟に対応。小規模展ながらこの展覧会と、学生や教職員、アート関係者、そして地域の人々を結びたのだ。

今後は、展覧会ウェブサイトでのアーカイブ化を進め、オンラインでの発信を続ける。また、来年2月に予定している京都での巡回展では、さらに多くの人々とアーティスト、作品を結びつけることだろう。

展覧会公式サイト URL: http://sites.google.com/view/agp2021/

◆Art collectors 2021 年 5 月号

歩く―感覚と思考の交差点―
4月19日(月)～5月8日(土)

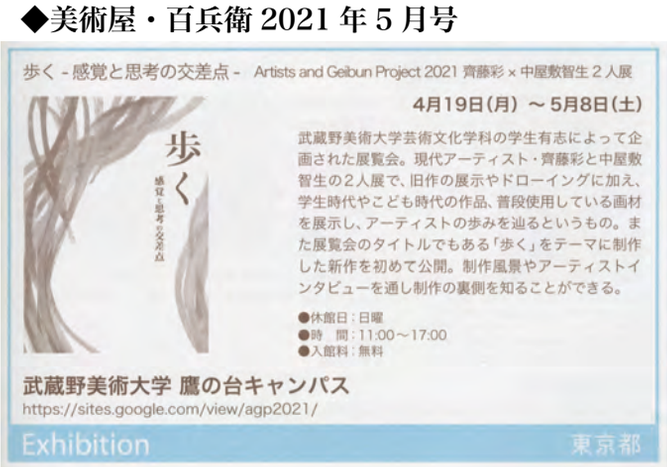
価格は要問合せ

アーティスト齊藤彩、中屋敷智生の2人展。展覧会テーマ「歩く」をもとに制作した新作をはじめ、ガラスに描くドローイングや、展覧会企画から実施までのプロセスをまとめたパネル・記録映像も展示する。

武蔵野美術大学鷹の台キャンパス　TEL.090(1122)9095(長谷川)
小平市小川町1-7-736

左：中屋敷智生「落穂拾い -Gleaning-」2020年
右：齊藤彩「無題」2018年

◆美術屋・百兵衛 2021 年 5 月号



歩く - 感覚と思考の交差点 -　Artists and Geibun Project 2021 齊藤彩 × 中屋敷智生 2 人展

4月19日(月) ～ 5月8日(土)

歩く
感覚と思考の交差点

武蔵野美術大学芸術文化学科の学生有志によって企画された展覧会。現代アーティスト・齊藤彩と中屋敷智生の2人展で、旧作の展示やドローイングに加え、学生時代やこども時代の作品、普段使用している画材を展示し、アーティストの歩みを辿るというもの。また展覧会のタイトルでもある「歩く」をテーマに制作した新作を初めて公開。制作風景やアーティストインタビューを通し制作の裏側を知ることができる。

●休館日：日曜
●時　間：11:00～17:00
●入館料：無料

武蔵野美術大学 鷹の台キャンパス
https://sites.google.com/view/agp2021/

Exhibition　東京都

【web サイト】

◆web 版美術手帖

◆artsacca report

【PR イベント】 アートミュージアム・アンヌアーレ（AMA）図書館総合展オンライン 2020

◆2020 年 11 月 22 日（日）14:00-15:00

◆AMA の詳細　https://www.am-annuale.jp

AMA の実行委員長である神代浩氏に声をかけて頂き、AGP2021 のメンバーが、活動紹介のため
オンラインイベントに出演した。

【特典企画 / 展覧会オリジナルグッズ】

本展では、展覧会オリジナルグッズの制作と、会期延長を記念した展覧会来場者への特典配布企画を実施した。

●オリジナルグッズ
・クリアファイル
・ポストカード
・karupi タイアップイヤリング
　株式会社日照堂の今泉志郎さんの紙イヤリング「karupi」とコラボレーションした
　展覧会オリジナルイヤリング

●特典企画
・初来場特典　　オリジナルポストカード or オリジナルクリアファイル
・リピーター特典　　オリジナルポストカード or オリジナルクリアファイル
　　中屋敷智生の作品小冊子
・オンライン参加特典　ポストカードセット（全６種）

中屋敷智生の作品小冊子

オリジナルクリアファイル

オリジナルポストカード

karupi タイアップイヤリング

08 展覧会評価

【展覧会評価 1 - 来場者】
〈来場者数 / 参加者数〉
総来場者数　651 名
総来場者数＋総参加者数　1,072 名
・1 日あたりの平均来場者数は 27 人。
・会期中で来場者数が最も多かったのは 4/19(月) の 72 人。

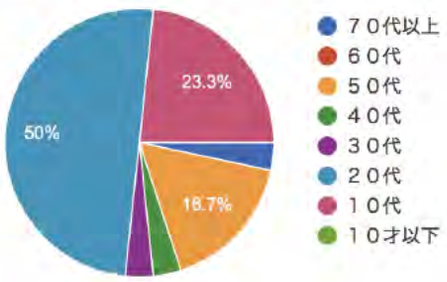
月日	来場者数	参加者数	実施プログラム	備考
4/19(月)	73	72	クロストーク「表現の歩み」	
4/20(火)	59	−		
4/21(水)	29	−		
4/22(木)	60	−		
4/23(金)	32	−		
4/24(土)	68		十人十色トーク①	
4/26(月)	9	49	芸文生が語る展覧会「ウラ話」	
4/27(火)	14	−		
4/28(水)	25	−		
4/29(木)	16	27	十人十色トーク②	
4/30(金)	25	−		
5/1(土)	3	−		
5/3(月)	8	42	十人十色トーク③	
5/4(火)	9	35	十人十色トーク④	
5/5(水)	8	−		
5/6(木)	17	40	十人十色トーク⑤	
5/7(金)	24	−		
5/8(土)	16	−		
小計	492	305		
5/10(月)	9	−		展覧会延長期間
5/11(火)	5	−		
5/12(水)	30	−		
5/13(木)	16	−		
5/14(金)	27	18	あおぞら保育園ギャラリーツアー	
5/15(土)	72	87	中国語ツアー	
5/16(日)	−	11	国立青柳中央会ギャラリーツアー	
小計	159	116		
合計	651	421		
来場者・参加者総数	1,072			

〈来場者アンケート集計結果〉

回答件数：30 件　回収率：4.6%

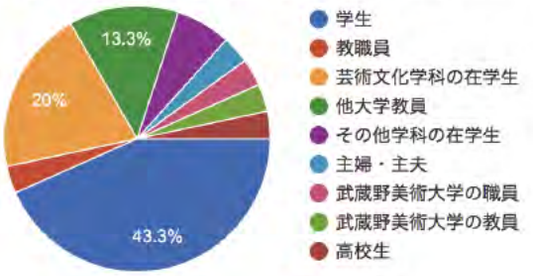
1. 年齢

10 代～20 代合わせて 7 割となり、在学生が多いことがわかる。次に 50 代が多く、他の各年代も一定数参加している。



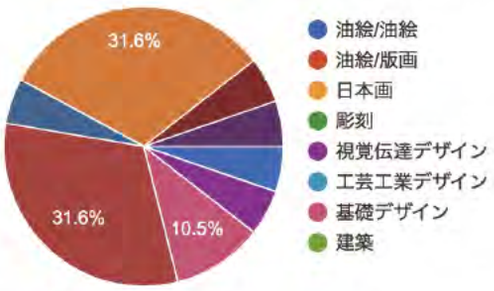
2. 所属

一番多いのは学生、次に多いのが芸文の在学生である。他大学教員や他学科の学生も一定の割合で来場しており、高校生や主婦・主夫など外部からの来場者もあった。



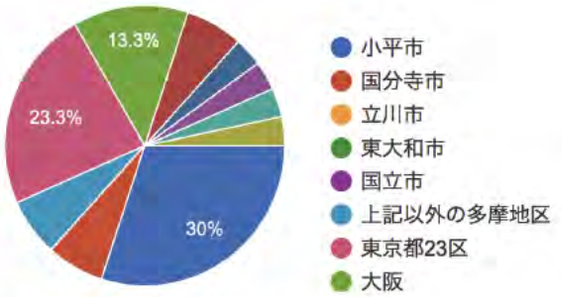
3. 学科

一番多いのが芸文の学生、次が油絵学科 / 版画、続いて基礎デザインという結果になった。ファイン系の学生だけでなく、デザイン学科の学生にも参加してもらう事ができた。



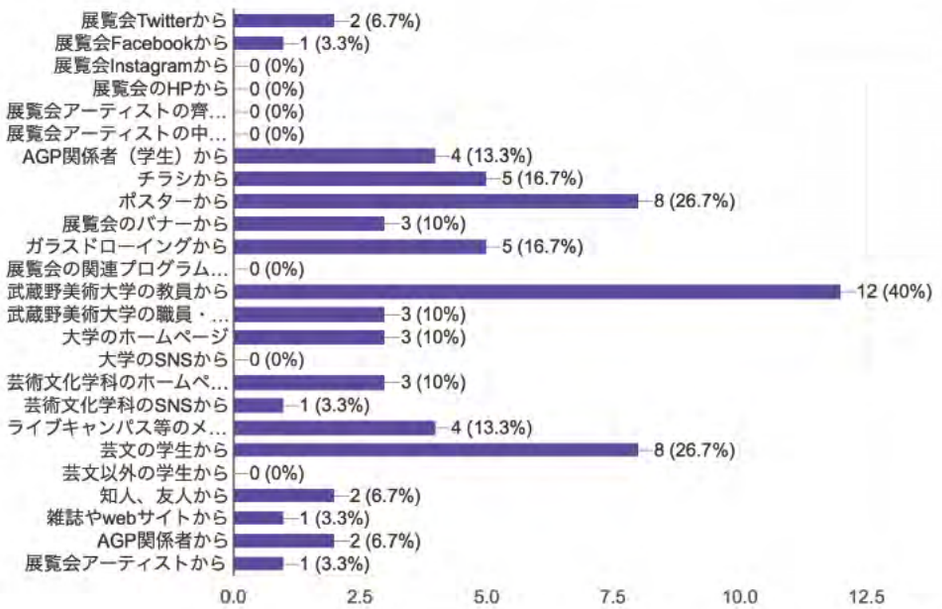
4. 住んでいる地域

小平市の他、東京都 23 区からの参加と、大阪からの参加が多く、オンラインを活かして遠方の方にも来場してもらうことができた。



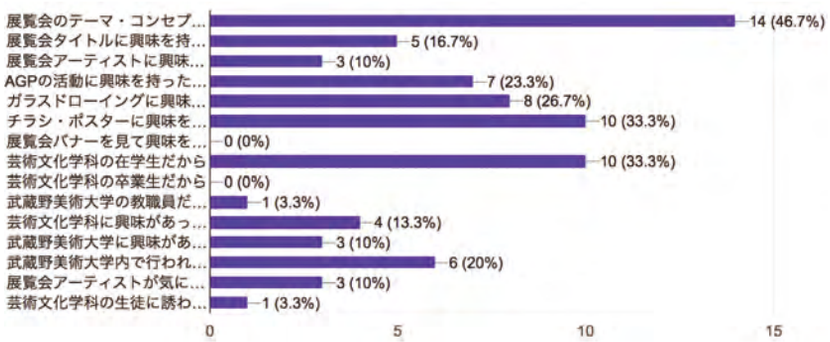
5. 展覧会を知ったきっかけ

武蔵美の教員がきっかけで知った人が 4 割、次に芸文の学生がきっかけになった人とポスターで認知した人が 2 割ずつという結果になり、口コミ効果があったことがわかる。またチラシ、ポスターの他に、ガラスドローイングから知った人も一定数おり、広報効果のあるプログラムだったことが伺える。



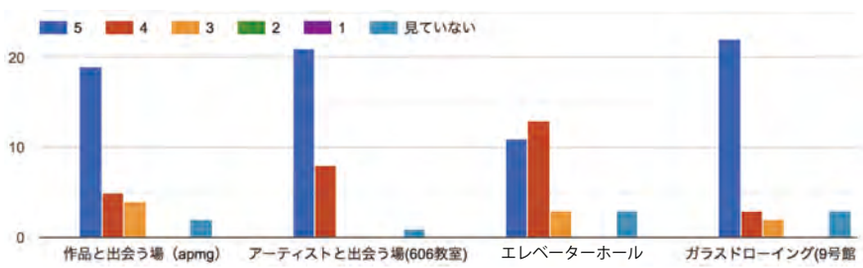
6. 来場した理由

来場した理由としては、「展覧会のテーマ、コンゼプトに惹かれた」が一番多く、本展の展覧会テーマ「歩く」が肯定的に受け止められたことがわかる。また、「チラシ・ポスターに興味を持った」と「芸術文化学科の在学生だから」が同率で高かった。
「ガラスドローイングに興味を持った」人も一定数おり、期待していた広報効果が得られた。



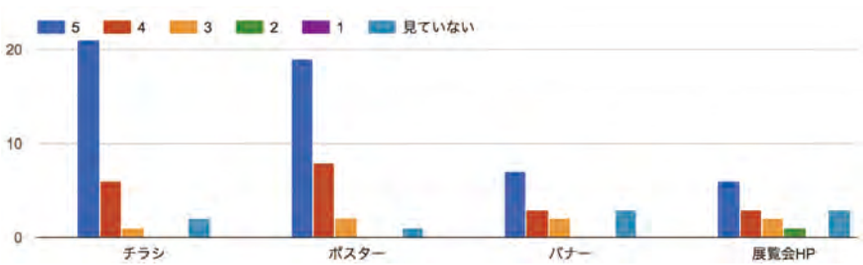
7. 展示室ごとの評価

展示室ごとの評価は、「ガラスドローイング」が一番高い結果となった。次に「アーティストと出会う場」が多く、意外なことに３つの会場では「作品と出会う場」が一番低かった。キャプション無しの展示からのわかりづらさが原因にあるとも考えられるが、それ以上にアーティストの様々な側面を見せる複数の会場構成が功を成したと言える。



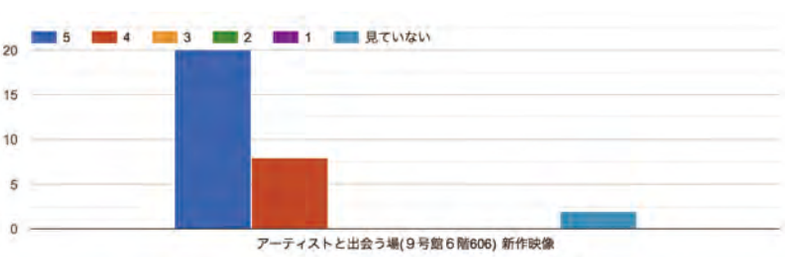
8. 広報物の評価

広報物の評価に関しては、「チラシ」が一番高く、その次に「ポスター」が高い結果となった。逆にバナーや展覧会 HP はあまり注目されておらず、チラシなど実際に目に触れる機会が多いものが効果的だった。特に展覧会 HP は「見ていない」人もおり、展覧会において存在感が足りなかったように思われる。もっと強く発信すべきだった。



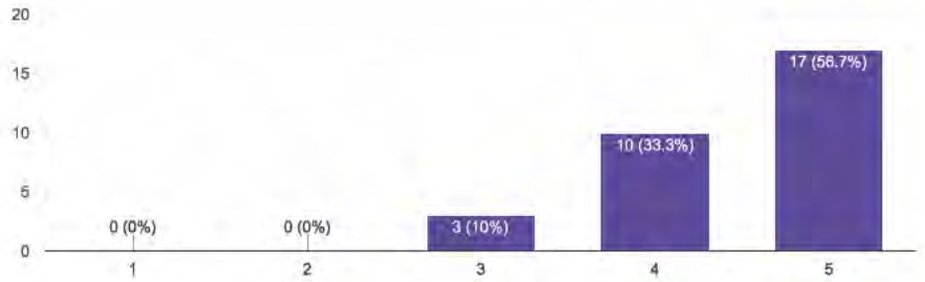
9.「アーティストと出会う場」新作制作映像の評価

新作制作映像に関しては、マイナス意見が全くなく、総じて高評価だった。「見ていない」人がいるが、時間の都合などで現場で見る事ができなかった人のために、web サイトに動画をアップしている。



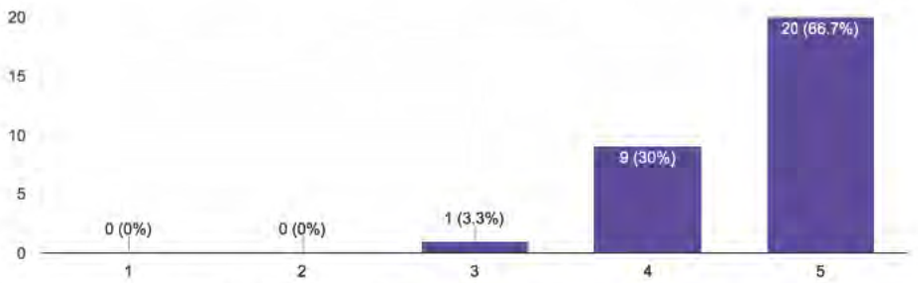
10. 展覧会を通して、アーティストの「感覚」「思考」を感じることができたか

展覧会コンセプトである、「アーティストの感覚や思考を感じる」については、「5 とても感じる」が一番多く、5 段階評価では 4.4 という高評価となった。
アーティストの人間性を見せる「アーティストと出会う場」が良い影響を与えたと思われる。



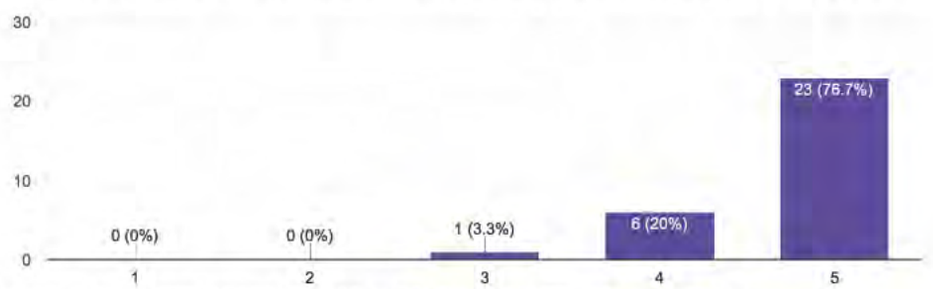
11. 展覧会の満足度

展覧会の満足度は、5 段階評価のうち 4.5 という高評価となった。3 つの会場がそれぞれ充実していたことが伺える。



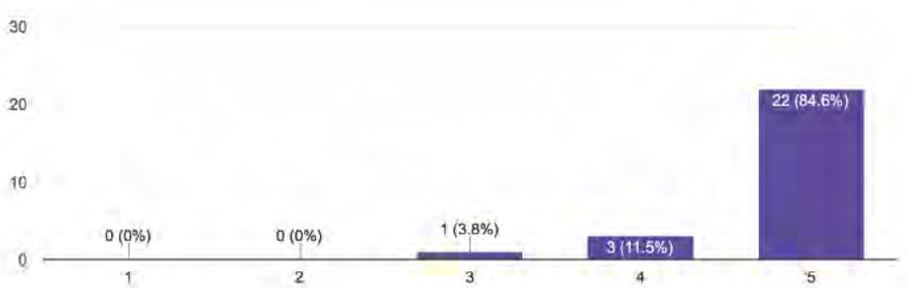
12. 今後、アーティスト × 学生の展覧会が開催されたら見に行きたいと思うか

アーティスト × 学生の展覧会については、5 段階評価のうち 4.7 という高評価となった。AGP2021 のような、アーティストと学生がともに作る企画については 9 割以上の人が肯定的な意見を持ち、今後も期待していることがわかった。



13. 今後、芸術文化学科主催の展覧会に来場したいと思うか

芸術文化学科主催の展覧会については、「来場したい」人が 9 割近くとなり、五段階評価では 4.8 という高評価となった。今後も期待する人が多くいることがわかった。



14. 来場者の感想

・楽しかった。
・普段は行くのは美術館ばかりですが、大きな美術館では見れないような展示で
とても面白かったです。芸術文化学科の方にも詳しく話を聞けて良かったです。
・作品がどれも色鮮やかで、とても楽しい気分になりました！
こんな時代だからこそ、齊藤さん、中屋敷さんの絵からパワーを頂きアートの面白さを
再認識させて貰いました。
AGP メンバーの皆さん本当に本当にお疲れ様です！！
作品に対してだけでなく、来場者への細やか過ぎる気配りがとても素敵でした。
・展示、企画、チラシ・ポスターなど様々な点で工夫されていて、作品への興味や理解が
深まりました。このような展覧会をまた拝見したいです。
・企画が練られており、面白かった。
・お二人の作家さんと彼らの作品と学生さんと。さまざまな人、もの、場所の交差によって
武蔵美の 9 号館が賑やかに、華やかになった印象がありました。様々な人との交流が、
こんなにも自分の視野、感性を広げ、様々な人とのつながりを持てるとは思っておらず
感謝しかありません。素敵な展覧会でした。ありがとうございました。
・作品だけではなく制作風景の映像も見ることができたのでよかったです。
・参加学生の、企画への熱意が感じられたので、安心感がありました。
・ゼロスペースやゼミ室まで使った展示は、意外性と見応えがあった。
会場から会場を移動する過程までを含めて「歩く展」であり、実際に会場に足を運んで
生で作品を観賞する意味を改めて感じた。

会場の様子（左：「アーティストと出会う場」右：「作品と出会う場」）

〈感想の足跡〉

「感想の足跡」来場者に展覧会の感想を書いてもらい展示するプログラム

〈感想の言葉〉

・息が止まるかと思いました。それと同時になんだか懐かしくなりました。作品や作り手のエネルギーが強いと感動する、とか心が凪ぐことにつながるのかもしれません。
・ひたすら作品から出るオーラに痺れてました！とてもかっこいい展示でした。
・齊藤さんと中屋敷さんの作品、どちらも個性的で面白かったです。
・めっちゃ歩いた。
・普段感じないような気持ちになる作品を見た気がします。Feel good!
・作品からあふれるパワーに圧倒されました！色と画材の動きから、元気、パワーを感じます。
・違うようで同じ、同じようで違う２人展、楽しかったです！
・美術館にはない「生」を感じる展示で、とても面白かったです！
・人間はどこまでもいけると強く感じました。
・「芸文生もここまで出来る」という希望を感じた。
・純粋に綺麗だと思って見ていました！良かった〜！！
・コロナ禍でもがこうとする作家２人の思考を垣間見れました。楽しかったです！
・彩様　ご無沙汰しております。30 年振りに武蔵美に来ました。すっかり変わってびっくりです。
・傾向の異なる２人の作品がどこかで交差する瞬間がありました。何度も足を運びたくなる展示です。26.27.30 が特に好きです。
・インパクトがあり、惹きつけられる絵ばかりで感動しました！また来たいです！
・散歩していてずっと染み入ってくる心地よい風景のような作品たちでした。ゆっくりと、あるいは早足で毎月歩いて見たい展示です。
・大学でこのような展示が見れて楽しかったです。２人とも色がとても印象的でした！
・楽しかった!!
・すばらしい。コンセプトに惹かれて来た。想像力を喚起する作品で素敵だと思った。
・２人の作家さんの異なる作風が互いに引き立てあい相乗効果となっているように感じました。中屋敷さんの絵の具のマーブリング（でしょうか）がどう作られたか気になりました。
・油の匂いや筆跡には作家によって様々な時間の流れを持っているなと感じました。素敵でした。
・同じ作品でも近くでみるのと離れて見るのとでは表情が違っていて楽しめました！
・スタンプラリー頑張りました！良い企画！コンプリートできました！１番のりです！ありがとう、ゼミ室の展示良かったよ。
・狂気がなにかを突き止めようとする行為自体が狂気だね。
・うまく言い表せないけれど、”生”の作品が見れてよかったです！展示も美しかったです〜。
・ガラスドローイング素敵！ cool! かっこいい！ Beautiful! 感動！消してしまうのもったいない！
・時と感覚がその場に存在している。それが心地よかったです。
・学生さんが一年かけて練り上げたプロジェクト、魅力的な２人の作家が作品が交差する場（トポス）を立ち上げ、とても面白く、刺激的な展示でした。現場を見られて良かった、ありがとう。

【”感想の足跡”より、来場者の感想記録】

【展覧会評価 2- 参加者】

◆クロストーク「表現の歩み」

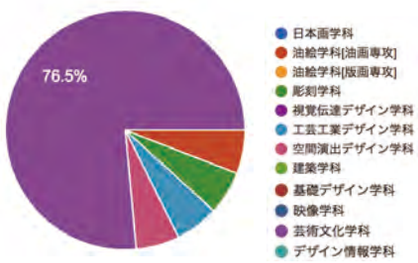
4/19（月）17:00~18:30　※課外講座のため学内者限定

アーティスト齊藤彩、中屋敷智生と、ディレクター杉浦幸子、学生リーダー大西によるトーク。

参加者数：72 名

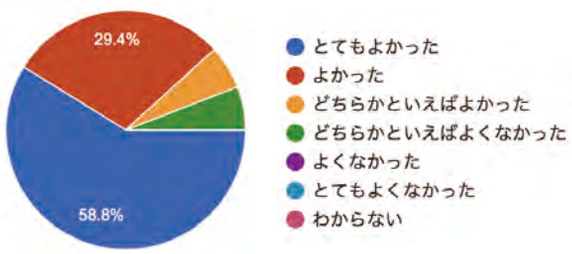
1. 学科

参加者は芸文の学生の他、油絵学科、彫刻学科、空間演出デザイン学科、工芸工業デザイン学科の学生が一定の割合で参加していた。幅広い学科の学生に興味を持ってもらえた。



2. プログラム内容の評価

「とてもよかった」と「よかった」が合わせて 9 割近くとなり、高い評価を得た。一方で内容についてマイナスな意見もあり、今後の改善点となった。



3. 参加者の感想

・作家さんのことを知る機会があまりなかったので参加してよかった。

・芸文の人たちが普段何をしているのかよく知らなかったのでいい機会でした。
基本的に油絵学科では自身の制作のことしか考えていなくて、講評の際もたまたま同じ部屋になった人と隣り合わせで展示するだけで、自分の作品の見え方や設置の仕方など、普段の授業だとこだわるにも限界があるなと感じているので、こういう風に一から展示を自分たちで作り上げるという試みはとても面白そうだなと思いました。9 号館のガラスにドローイングが施されているというのは初めて知りました。もっと散歩・寄り道すべきかもしれません…。

・学生、作家、参加者など本企画の関わる多くの人によい影響があった素晴らしい企画だと思いました。

・中屋敷さんが、仕事をしているときにふとアイデアが出てくる、だから仕事をする時間も必要であるとおっしゃったことが印象に残りました。中屋敷さんは一色置くのに 1 日考えることもあるのに対し、齊藤さんは早描きで、作品は 1 日で仕上げたいというのも凄いと思います。作品を描くペースが全く違うお二人が並ぶところも面白いなと思いました。

・オンラインという形でしかまだ作品をみたことがありませんが、実際にみて感じたくなりました。

・アーティストの活動の源を知ることができたとともに、作品や作家、鑑賞者、聴衆者が言葉の力によってつながっているように感じました。クロストークの中で中屋敷さんが、他者に見てもらうことが活動のエネルギーにつながるとおっしゃっていたように、考えについても言葉化し、他者と交わすことによって、より高まったものになるように思いました。

・参加者の質問からアーティストトークが広がったのが良かったと思いました。
もう少し、展覧会プロジェクト制作過程についても話を聞きたいと思いました。

・齊藤さん、中屋敷さんそれぞれの作家さんが作家活動をする中で考えていることや、インスピレーションを受けているものなど、普段は中々聞くことのできない生の声を聞けてとても良い学びになりました。

・学生や教授、もちろんアーティストの方々がお話をどんどん展開させていくトークイベントだった。
クロストークの「クロス」がよく発揮され、聞いていてずっと楽しいイベントだった。

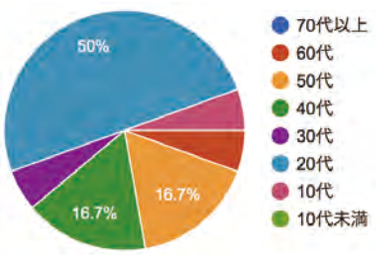
・この展覧会テーマの企画意図やアーティストさんの制作についての話が聞けたことが良かったです。
またチャットが活発に動き、トークに反映されていたのが良かったです。

◆芸文生が語る展覧会ウラ話「歩く」ができるまで

2021 年 4 月 26 日（月）17:00~18:10
展覧会の企画・準備に携わった芸術文化学科の学生 10 名が、企画のウラ話を語った。
参加者数：49 名

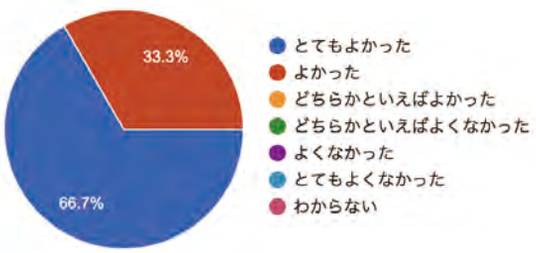
1. 年齢

20 代が一番多かった他、40 代〜50 代の参加率も高く、幅広い年代に興味を持って参加してもらうことができた。



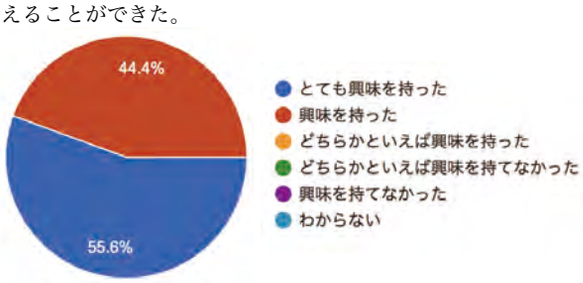
2. プログラム内容の評価

プログラムの評価は「とてもよかった」「よかった」で締められ、全ての意見が肯定的だった。



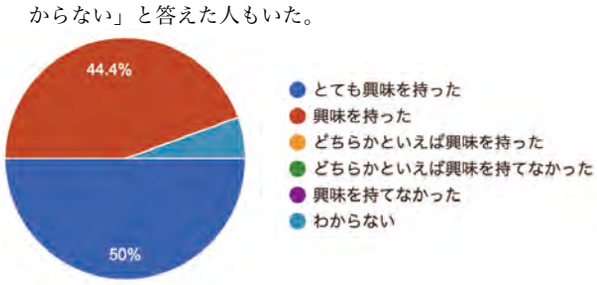
3. 展覧会に興味を持ったか

全ての人が展覧会に「とても興味を持った」、または「興味を持った」と答えた。展覧会の裏側を参加者に充分に伝えることができた。



4. 芸術文化学科に興味を持ったか

芸術文化学科に興味を持った人は、「とても興味を持った」「興味を持った」合わせて 9 割以上となった。一方で「わからない」と答えた人もいた。



5. 参加者の感想

・裏話、とても良かったです。10 人がそれぞれの持ち場で、立場で頑張りましたね。
展示の工夫、助成金の申請、スケジュールの調整、パンフレットのこだわり、広報の大変さ‥、
すごい経験だと思います。それを楽しく乗り越えた 10 人の思いが、zoom から溢れてました。
日頃、zoom は会議や講座で利用するけれど、久しぶりに楽しい zoom に会いました。ありがとう。
お疲れ様でした。
・展覧会を作る上で学生がどのような動きをして、開催するまでにいたったのかがわかるトークで面白かったです。展覧会がどのように作られるか普段を聞くことができないため、このようなイベントが開催されるのは個人的によかったと思いました。また芸文生は学芸員や展覧会を作るプロジェクトに参加していたりするので、今後の参考に話を聞けてよかったです。
・展示の裏側を語るトークイベントは稀なので、いろいろな話を聞けてよかった。
より深く話を聞ける機会があれば参加したい。
・それぞれの班のこだわりが聞けてとてもよかったからです。
・今回の展覧会へ向けてのご苦労や大変な時間のかけ方がよく伝わったため。
・展覧会をいちから作る上での難しさを感じ取ることができました。
・展示を見ただけでは分からない、苦労が分かりそれだけ想いが込められている展覧会だと分かったので。
・各担当がしっかりと責任を持って準備されてきたことが伝わるトーク構成でした。

・自分が参加している運営スタッフでは本当に最後の最後の部分しかお手伝いすることが出来ないので、それまでに先輩方が積み上げてこられた活動について知ることが出来て良かったです。
時間の問題であまり一つ一つについては深くはなかったですが、それぞれの部署での一連の流れを見ることが出来、短い間でとてもためになる学びをすることが出来ました。
・一年間この展覧会を一緒に作り上げてきた中で、みなさんの表舞台の仕事内容を深く知ることができたから。
・準備の状況が少しわかった。
・展覧会を見るだけではわからない裏話が聞けたから。
・中屋敷さん謝辞の中で、プロ顔負けのアフターケアーとの評を聞き、感心した。
・10 人の皆さんの頑張りは、全て印象に残りました。良かったです。作家の方の「こんなに良い展覧会はめったにない」とのコメントが、今回の企画・展覧会を語っていますね。見に行けないのが残念！素敵な見ごたえのある楽しい展覧会なのでしょうね。
・マニュアルの不備に気付き、何度もリバイスしている話に関心した。現在は、商品のマニュアル等は紙ではなく、ネットでダウンロードする時代に入っているので、完成度の高いマニュアルをつくる仕事は、社会にでても役立つと思いました。
・楽しい時間でした。映像や写真（助成金申請書やスケジュール表、メンバーの活動時の写真など）があり、10 人の声も聞けて、頼もしい学生が居るな～と嬉しくなりました。今後の皆さんのご活躍に期待します。
・芸文の学生と、ファイン系の学生が共に展示を作る機会があれば、参加したいと思いました！
・教員をしている性格上か、この zoom を見ながら（学生に見せたらいい勉強になりそうだなあ…）と考えていました。 これだけの人数にしっかりと役割を与えられたのは大西さんの素晴らしいリーダーシップがあってのことでしょう。本当にお疲れさまでした。これからも応援させていただきます！
・京都精華大学芸術学部で学生たちが実践的にキュレーションを学びながら企画展を作っていくという授業を教えている吉岡恵美子といいます。中屋敷さんから情報提供いただきました。似たようなプロジェクト型授業を展開していますので、今日は参考になるお話を聞くことができてよかったです。今回の展覧会の記録冊子の制作予定はありますか？
・本日はありがとうございました！！みなさん 200 点です！！
・記録の紹介はとっても面白かった、いろいろ勉強になりました。
・準備に長時間準備に費やしてきたプログラムが、コロナ禍（緊急事態宣言等）で思うように進捗できていないのはさぞかし悔しいでしょうが、この経験を社会にでて生かしてください。

◆十人十色ギャラリーツアー

4/24（土）、4/29(木)、5/3(月)、5/4(火)、5/6(木) 12:30~13:00

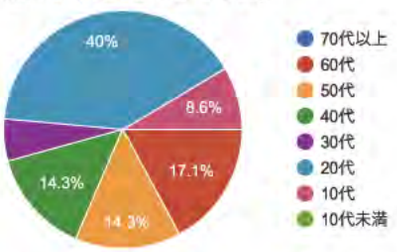
展覧会の企画・準備に携わった芸術文化学科の学生 10 名が、日替わりで展覧会を案内した。

総参加者数：184 名

各回平均参加者数：36 名

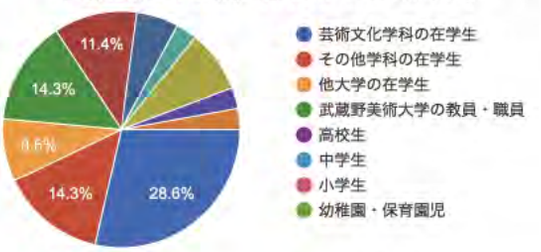
1. 年齢

参加者の年代は「20 代」が一番多く、次に多いのが「60 代」、次いで 40 代～50 代という結果になった。幅広い年代に参加してもらうことができた。



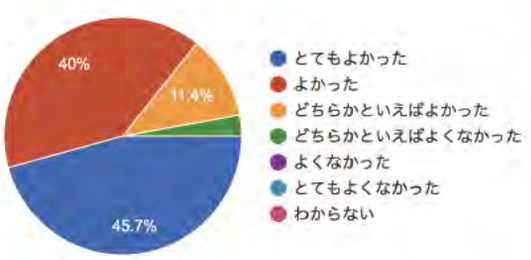
2. 所属

一番多いのは「芸術文化学科の学生」次に「他学科の学生」と「武蔵美の教員・職員」が同率という結果となった。学内広報の効果があり、学内者が多く参加した。



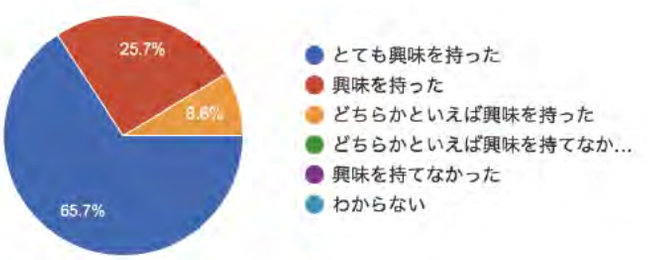
3. プログラムの評価

プログラムの評価は、「とてもよかった」「よかった」が合わせて 8 割以上となった。しかし、「どちらかといえばよかった / よくなかった」というマイナス寄りの意見も見られ、改善点は多々あることがわかる。



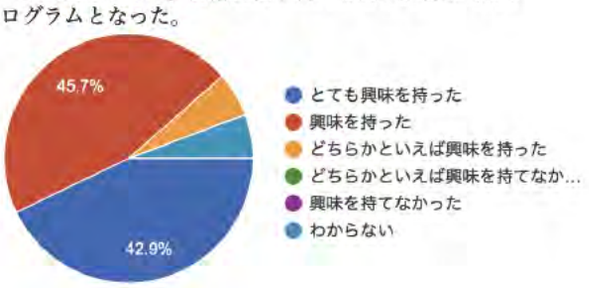
4. 展覧会に興味を持ったか

「とても興味を持った」が 6 割以上を占め、次に「興味を持った」が 2 割となった。全体的に参加者が展覧会に興味を持ったことがわかる。



5. 芸術文化学科に興味を持ったか

「とても興味を持った」と、「興味を持った」が合わせて 8 割以上となった。芸術文化学科へも良い影響があるプログラムとなった。



3. 参加者の感想

・私はよく美術館に一人で行くのですが、こうやってオンラインという形ではありますが、ほかの人の作品に対する感想、解説を聞く、というのが新鮮で楽しかったです。

・現在、現地へ見に行けない状況なので、作品のマチエールなども垣間見れて、作品は 1 点ずつでしたが実際の作品の臨場感を感じ取れました。

・運営されている学生皆さんの直の動きが感じられたから。

・AGP スタッフによる作品制作の解説と来場した方によるトークが円滑に進められていてよかったです。
とくに動画解説を聞いてから作品鑑賞するのが面白かったです。
・全て学生主体で進められていたところが楽しかったです。
・実際に展示会場に行けない中で、最も展示空間を感じることができた為です。
・幅広い方に作品の感想を聞いていて、自分以外の方の視点で作品を見ることができたので、大変面白かったからです。
・オンラインということでしたが、思ったよりも作品の細かいところまで見られたのが良かったです！
作品にまつわるちょっとした裏話 (新作の鳥のお話) も聞けたのも嬉しかったです。
・単なる作品紹介や解説ではなく、実際に作品を見たくなるように、上手に誘導している内容でした。
作家自身の話も、とても貴重ですね。
・作家さんの制作道具などを拝見でき、学生さんの解説も分かりやすかったので。
・足を運ばずに展示の臨場感を味わうことができた。
・入りが外で、段々会場に向かっていく行程がまさにツアーという感じでワクワクしました。また、場所移動の際に夜のガラスドローイングの風景と音を映し出すのも細かいところまで考えられているのが伝わってきました。
・一点ずつだったから、短い時間でも落ち着いて鑑賞することができました。作品を見て思ったことを言葉にする機会があって良かったです。
・スタッフの方々が一生懸命で良かったです。マイクトラブルや作品が見にくい場面がありましたが、一つの作品をピックアップしてじっくり見られたので良かったです。
・作家のみならず、企画者側の声を聞くことができるのがギャラリーツアーの醍醐味ですね。案内者のキャラをもっと立てていいと思いますね。でも楽しく参加しました。
・制作過程を見ることができたのが印象深かったです。絵の具を投げるシーンは衝撃で、作品を見る目が変わりました。
・注射器を使った作品は、印象的でした。言われないと分からないですが、それを知ると、別の見方が出来て楽しいです。
・齊藤さんの作品は見ていて飽きないし、ダイナミックな絵でも意外と落ち着いた気持ちになれます。今日見た中屋敷さんの作品は、後ろの青い部分が空のようで、まるで空を見上げているような絵だな、と思いました。
・「どろろ」って呼んでいる立体作品が印象深く拝見していたのですが、注射器で「描いて」いたと知り、ほうっ！と思いましたね。
・担当されている学生さんそれぞれにリズムがあって、まさに「十人十色」でした。皆さん自身の捉え方や目線も一緒に感じられて、とても面白かったです。
・30 分という短い時間の中でここまで内容を落とし込めるのはすごいなと感じました。大変面白かったです。展示も近いうちに観に行きます。
・今回のイベントは老若男女、様々な世代の方が来場され、それぞれの視点で作品を語っていて興味深かったです。
また、それぞれ AGP スタッフの感想もきけて、トークをまわしていくのも上手くて、聞きやすかったです。
次のイベントでは異なるトークが展開されることを期待してます。

【展覧会評価 3- アーティスト】

◆アンケート実施概要
本活動の参加アーティストである齊藤彩、中屋敷智生の２人を対象に、活動目的の達成度を知るためのアンケート調査を行った。

◆アンケート実施結果
アンケートより、齊藤彩は「中屋敷智生の色彩感覚に刺激を受けた」、また中屋敷智生は「齊藤彩の自分にない感覚や発想は好奇心を再び呼び戻してくれる」と述べており、お互いの制作活動から充分な刺激を受けたことが伺える。また、学生が提案した制作プロセス映像の撮影やガラスドローイング、キャンバスの新作制作等、初めてとなる試みにも積極的に取り組み、齊藤の「苦手なキャンバスも新たな展開として制作できた」という言葉にある様に、それぞれの制作にとって糧となる経験になったと思われる。
本活動の目的の１つである、「アーティストが互いの制作や学生との交流から刺激を受け造形活動をより豊かなものにすること」は達成できたと考えられる。

〈参照〉アーティストアンケート全文
①今回の２人展を通して、お互いの制作や作品から刺激や学びを受けることができましたか？
・齊藤彩　　とてもできた
・中屋敷智生　とてもできた

②上記回答の理由を教えてください。
・齊藤彩　　**中屋敷さんの色彩感覚**に、そして作家としても人としてもかっこいいなあと思い、背筋の伸びる思いです。
・中屋敷智生　画家齊藤彩さんは、**自分には無い感覚や発想**を持ち合わせており、わたし自身が遠い記憶の彼方に忘れてきた絵を描くことの楽しさや純粋さ、**好奇心を再び呼び戻してくれる。**そのような存在です。

③【AGP2021】を通して、学生と共に企画・運営を行って良かったと思いますか？
・齊藤彩　　とても良かった
・中屋敷智生　とても良かった

④上記回答の理由を教えてください
・齊藤彩　　若い才能のある学生さんたちに展覧会を作っていただいた事。
・中屋敷智生　AGP2021 の学生のみなさんは、学生だからといった甘えが一切なく、時には失敗をすることもありましたが、すぐに軌道修正し立ち直り、真摯にわたしたちアーティストと接していただけたお陰で、最高の展覧会を築き上げることができました。
また、緊急事態宣言下という逆風にも負けず、学生たちが率先して広報やイベントの告知の方法を改良したり、オンライン・ライブツアーの企画を増やすなど、その状況下でできる最善のベストを尽くしてくださりました。

⑤「歩く」をテーマとした新作制作の感想を教えてください

・齊藤彩　　**苦手なキャンバス**も、新たな展開として制作出来ました。

・中屋敷智生　普段から、歩くことを通して作品のアイデアを探したり考えたりしていたので、無理なく新作制作に挑むことができました。

⑥「歩く」をテーマとした新作制作の記録映像を撮影した感想、また完成映像を見た感想を教えてください。

・齊藤彩　　カッコいい映像に、ドキドキしました。

・中屋敷智生　自分が制作している姿を映像を通して見るのはとても新鮮でした。またわたし自身は普段通りのつもりで描いていた行為も映像をご覧になっていただいた鑑賞者にとっては刺激的だった様で、作品、年表、簡易アトリエ、資料と合わせて設置できたことは効果的だったと思います。

⑦ガラスドローイングを制作した感想を教えてください。

・齊藤彩　　中屋敷さんとの制作が大変心地よかったです。

・中屋敷智生　過去にもガラス壁面に絵を描いたことはあったのですが、いざ横 35m、縦 3m 超えのガラス壁面と対面した時は、正直たじろぎました。その日初対面だった斎藤さんと特に話し合うこともなく、両者試し描きのつもりでぬるりと描き始めたのですが、そのまま阿吽の呼吸で無心のまま一気に 35m を描き切ることができました。完成した作品に大きな手応えを感じることができました。また何より学生のみなさんがガラスドローイングを描くための準備をして支えてくださったおかげで、わたしたち二人は気持ちよく描けたのだと思います。

⑧【AGP2021】に参加して印象に残った出来事を教えてください。

・齊藤彩　　人事を尽くして天命を知る

・中屋敷智生　昨年の春の授業だった頃からも含めて、全てが斬新で刺激的で印象的でしたので語り尽くせません。

⑨【AGP2021】の改善点があれば教えてください。

・齊藤彩　　絵を描く時間をもう少し欲しかったです。

・中屋敷智生　細かなことを言えばあるのかもしれませんが、大筋の部分ではありません。また本展覧会のディレクターでもある杉浦先生の指導のおかげで、改善点は毎回その場で指摘し改修しています。

⑩【AGP2021】の経験を活かして、今後取り組みたいことがあったら教えてください。

・齊藤彩　　人との繋がりを大切にしたいです。

・中屋敷智生　まだ本展覧会で実施していない「造形さんぽ（ワークショップ）」とこの展覧会の続きが観たいです。

⑪今回のプロジェクトの感想を自由にお書きください。

・齊藤彩　部活動みたいな、素敵な時間を皆さんと過ごせたこと 幸せでした。ありがとうございました。

・中屋敷智生　武蔵野美術大学芸術文化学科の杉浦幸子先生（ディレクター）、米徳信一先生をはじめ、多くの先生方、助手さん、そしてスタート時点からの戦友である有志学生 10 名を含めたコアメンバー総勢 31 名 + 中国語ツアーメンバー 6 名 +AGP（nature、No. 6、梅雨に負けない、♡ALL GARLS♡、臨機応変)※の学生のみなさん、齊藤彩と中屋敷智生の 2 人展を作るために昨年の 4 月から丸 1 年かけて共に歩んでいただき誠にありがとうございました。

みなさんと共に育てた「歩く展」は、まだしばらく続きます。次回はみなさんお客さんとして京都巡回展、日動コンテンポラリーの齊藤彩、中屋敷智生、2 人展を楽しみにお待ちいただけたらと思います。

※2020 年 5 月〜8 月の授業で、受講生を 5 チームに分けた際の各チーム名

【展覧会評価４- 学生】

◆アンケート実施概要

本活動に参加した学生コアスタッフ、運営スタッフを対象に、活動目的の達成度を知るためのアンケート調査を行った。

〈**コアスタッフアンケート**〉

◆アンケート実施結果

AGP2021 の参加について、また AGP2021 で得た「コトづくり」の学びについて、10 人全員が肯定的な意見を持っている。実際に展覧会を行うことで「授業では得られない学び」を感じ取った、また展覧会の運営における失敗と試行錯誤を繰り返すことが自身の大きな学びに繋がったという声が多かった。リアルな展覧会づくりを体験するだけに終わらず、自分たちで試行錯誤しながら状況に柔軟に対応したことが「コトづくり」の深い学びに繋がっていると考えられる。

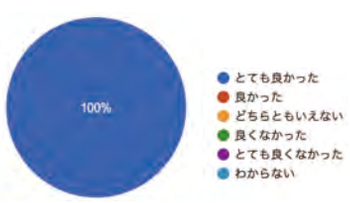
改善点としては、余裕あるスケジュール立案や有意義なミーティングの仕方について挙げられた。また、展覧会開催以降の運営について詰めが甘かったという意見もあり、事実「運営スタッフ」に大部分の対応を任せてしまっていたことや、会期中のブラッシュアップを充分に出来なかった点は反省点となる。

以上のことより、学生が主体的に学びながら、反省点・改善点を客観的に捉えていることがわかった。

本活動の目的の１つである「学生が展覧会運営を通して得た学びを今後の”コトづくり”に活かす」は、達成できたと考える。

〈参照〉コアスタッフアンケート全文

①AGP2021 に参加して良かったと思いますか？



②上記回答の理由を具体的に教えてください。

・多くの方々の協力を頂きながら展覧会企画を策定し、実施まで行う経験を、リアルに行うことができたため。ムサビ生・教職員など学内のターゲットから発展し、地域の方や学芸員など外部のお客様にも多くご来場いただくことができた。ムサビ以外の友人にも興味を持ってもらえて、関連イベントにも参加してもらえた。また、自己満足的な展覧会で留まらず、良い展示だったと声をかけてもらう機会も多くあり、社会に対して良い影響を与えることができた。国の垣根も超えて中国語オンラインツアーも開催し、文化交流の場を広げることができた。
コロナ禍で行われた展覧会として手探りで実施したが、自分の経験と社会に対して実績が生まれた。

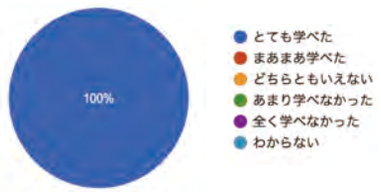
・学生時代に現役のアーティストの展覧会づくりに携わるという大変貴重な経験をすることができたから。また、学生であるという点において、多くの失敗や反省点がありながらプロジェクトを進行し、試行錯誤を繰り返す時間があったため、とても学びの多い体験となった。

・一生懸命つくったものを一生懸命伝えれば、伝わる、という事を、来場者の感想や京都巡回決定から実感しました。これから「コトづくり」をやるときに、自分の自信になる経験だったと思います。

・授業をうけているだけでは得られない経験と学びを得たから。

・メンバーそれぞれが、自らの役割がどんなものかを理解し、自覚をもって活動するために、リーダーとして自分は何をすべきかを考えることができ、とても貴重な機会であった。現状を理解し、どう改善するかを考えることや、学び続ける姿勢は、社会に出るにあたって、非常に重要であり、充実した学びをえることができた。

③AGP2021 に参加して、「コトづくり」に関して学ぶことができましたか？



④【AGP2021】で学んだことを自由に書いてください。特に「コトづくり」に関して得た学びがあれば、積極的に書いてください。

〈リーダー / サブリーダー〉

・「こうあって欲しい、こんなことを経験して欲しい」など、**来場者にどんな思い出を残して欲しいのかを考えることが何よりも優先すべきことであること**。計画的かつ柔軟なスケジューリング及びメンタルケア。
現状を理解して認め、現状からどこまでのクオリティを求めていくかという**クオリティマネジメント力**。

・どんな状況でも、「状況を読む」→「出来ることと出来ないことを整理する」→「目的のために行動する」という思考を素早くして、次の行動に向けて動き出すことが大切だと学びました。

〈展示班〉

・優先順位の付け方、何かを考える時に全体を見るの大事さ、緊急事態への対応、スケジュールの重要性

・展覧会作り、展示技法、アーティストと外部への接し方を勉強することができた。

〈教育プログラム班〉

・不特定多数の人に向けてのプログラムの実施の企画と実施に携わることができ、リスクマネジメントやプログラムの中身の構成の難しさを感じた。**コトづくりをする上では、どんな目的があって行うものなのかを常に念頭に置くことで、無駄のない企画の準備や良い構成を練ることができると学んだ**。また、人と人の双方向的なやりとりのあるプログラムにおいては臨機応変な対応が求められ、準備にないことであってもその場を生かした行動をとることで、想定外の良い結果が得られることもあるのだと感じた。**相手に想像力を働かせることが、コトづくりをするために大切だと学んだ**。

・特にライブペイントやギャラリーツアー、ワークショップという展覧会の中の「コト」に関するプログラムを担当した。その中で人と作品をつなぐこと、人と関わることでの喜びはもちろん、大変さや責任の重さを身をもって実感することができた。また、コロナ禍によりほとんどの企画がオンラインを活用する内容になり、オンラインイベントについて勉強できた。**「コト」に関するプログラムのデザインについて実践的に学ぶことができ、大変貴重な経験になった**。

〈デザイン班〉

チラシは外部に本格的に発信される最初の重要な要素であることを改めて実感した。最後までこだわった広報物は、それ 1 つでコミュニケーションが生まれる媒体になった。チラシを手渡したとき、紙やデザインに対して多くの人が興味を持ってくれて、自分がいなかった場でも話題に挙げてもらえていたことを後から聞くと、嬉しい反面、ものづくりの責任を感じて気が引き締まった。**入稿まで多くの人に協力してもらい、「チラシ・ポスター制作」のコトづくりが成功して、展覧会にも貢献できた**。チラシ納品後も、メインビジュアルが来場者や外部とのコミュニケーションを生み出し、「コトづくり」の一端を担った。展覧会そのものがコトづくりで、小さいコトの積み重ねで実現できた。**コトづくりを通してコミュニケーションが生まれ、人の輪が広がっていく様子を肌で感じることができた**。そして、実現するためには、予算や人のデザインなど様々な課題を解決する大変さも経験できた。

〈広報・記録班〉

作品の制作といったものづくりと違って、コトづくりは明確な終わりなど、色々な意味で制限が少ないと思った。あらゆる視点があり、とにかく視点を広く持つ、考えを狭めないことが必要だと思った。**コトづくりは終わりがない分、より発展性があるのだなと感じた**。

〈総務・経理・開発班〉
・展示設営・撤収に流れが知れたのがよかった。
・何を一番優先して考えるべきなのか、それは作った「コト」に対する責任を持つこと、できる限りあらゆる可能性を模索して**作った「コト」を最大限活かすこと**だと学びました。企画したり作り出した後にもクリエイティブが求められ、そのために柔軟な行動力が必要になるのだと思います。

⑤AGP2021 に参加して、印象に残った活動経験や出来事を教えてください。

〈リーダー / サブリーダー〉
・リーダーとして上手く行動できなかった時、自分の現状を自覚･言語化することで、自分の置かれている状況を理解することで、次の行動をどうすればいいのかと考えることができることに気づけたこと。
・サブリーダーとして色んな班の調整や手伝いに行き、幅広い仕事内容を経験した。客観的にチーム全体を見て、プロジェクトを円滑に進めるように色々な配慮をしたことが印象に残っている。
〈展示班〉
・借用保険に関する調べや手続き、保険会社とのやりとり、新作に関する作家への頼み、展示作業
・アーティストと一緒に作品配置できること､教育プログラムの多様な形で実現できること､外部の方々から展覧会の感想をいただけること､こんなに多い先生と運営スタッフと一緒に協力で実現できること
〈教育プログラム班〉
・緊急事態宣言発令により、会期延長か否かを AGP2021 メンバーで話し合ったこと。いつ何が起こるか分からない状況で、咄嗟の判断や緊急時の対応について学んだ。留学生のメンバーから、「人事を尽くして天命を待つ」ではなく中国の「人事を尽くして天命をきく」という言葉が出たことも印象に残った。また、社会に開かれた展覧会を企画・運営していることを再確認し、社会とアートをつなぐ責任の重さ実感した。
・企画編のころから企画していた「感想の足跡」が、ブラッシュアップの過程でメインビジュアルの加わったより洗練された形で実現することができた。展覧会に実際に来ていただいた方々に直筆で感想を記入し、展示してもらえたことは、今回の「歩く」のコンセプトにある展覧会に実際に訪れて体験してもらえたことの証だと感じた。
〈デザイン班〉
グラフィック入稿から逸脱し、自分で選んだ紙が予想以上に見積もりが高かったこと。協力のもと実際にチラシが納品されたこと。壁や、BO パネル、バナーなど大きいものを制作することができたこと。教育プログラムを自分たちでデザインすることの難しさ。現場で日々更新されていく運営方式、やってみないとわからないことが見えてきた。
〈広報・記録班〉
特に自分が主体となって（十人十色の自分の回など話す側で）参加したプログラムにアーティストさんが聴く側でも話す側としても参加してくださったこと。またプログラムが終わった後すぐに意見をいただけたこと。齊藤さんと中屋敷さんは作品の出展をするというだけではなく、一緒に展覧会を作り上げていくスタンスで自然といてくださったことが本当に有難いことだと思った。
〈総務・経理・開発班〉
・一番はやっぱり京都への巡回が決まったときです。去年、自分の小さな部屋のオンラインでのやりとりから膨らませた企画が、大学で実現し、さらに京都にまで届くとは思ってもいません でした。いろんな人、場を繋いでいる瞬間を体験できていると思います。
・展示設営と展示撤収、最終撤収日の締めが達成感があった。

⑥AGP2021 の改善点を教えてください。

・展覧会が開始してからのタスクを明確化し、締切日を決めて、都度確認をとることをする必要があった。

・ディレクターとリーダーの役割をそれぞれ明確化し、リーダーによる確認の徹底をし、ディレクターへの確認の流れを作る必要があった。

・今誰が何を行っていて、どれくらい忙しいか等が可視化できるものを、プロジェクトの序盤の方から作っておいて、他の人のタスクを柔軟に引き継いだり助けたりすることが気軽にできるような環境にしていれば、もう少し余裕のあるスケジュールを立てることができたかもしれないと感じた。

・教育プログラムでは、プログラム数が非常に多かったので、再検討すべきだった。プログラム数が多く、一つ一つのプログラムにかける時間（リハーサルなど）が少なかった。

・振り返ると長期間のプロジェクトだということを理解するのにだいぶ時間がかかったように思う。3 年後期の間は特に週一回の定例と、より回数の少ないロングミーティングが発表の場のようになってしまっていたのがよくなかった気がする。

また会期が始まるまでは会期中にブラッシュアップをするという可能性を全く考えられていなかったため、焦りすぎていたように思う。展覧会が始まる前までに決まっているべきことを優先して、計画していることを終わらせることではなく、より良い形で作り上げていく意識が必要だったように思う。

⑦AGP2021 の経験や学びを、これからどのように活かしていきたいですか？

・将来、学校で、本プロジェクトで培ったマネジメント力を活かして授業つくりをしたい。

実践的な展覧会の企画･運営の経験をいかして、実際に生徒が展覧会を企画して、リーフレットやチラシを作る授業展開をするなどの授業をしたい。また、チーム学校として、たくさんの人達との関わりが必要とされており、今回のプロジェクト以上の人との関わりがあるため、コミュニケーションを積極的にとり、お互いを理解して、ひとつの目標に向かって協同していくことにいかしたい。

・今後卒業制作や、社会に出て仕事をするときに主に活かしていきたい

チームでプロジェクト進行をするときの流れ、動き、スケジュール

コトづくりに参加してくれた人に何を伝えたいのか、どんな形で恩返しができるのか目的・コンセプトをはっきりさせることや、モノづくりをするときにどれくらい時間がかかってリアルに予算が必要なのかを考える視点や一層相手の立場、気持ちを考えながら、プロジェクトや企画を考える視点

・これからも展覧会やイベントの企画に関わりたいと思っているので、「作ったコトに責任を持ち、最大限価値が発揮できるよう柔軟に活動する」というここでした新たな発見を忘れず、また企画し、実践した後が大切だという学びを活かして今後も活動したいと思います

・まだまだ得た経験を自身の学びに落とし込めているか分からないので、何か困った時や行き詰まった時にあの時、こんな時はこうだったなと今回の経験を思い出して今後の選択や動きに活かしていきたい。今回の経験や学びを自身の引き出しとして活かしていくことが出来るように考える。

・よりキュレーションで地域と繋がることに興味を持つようになり､より深掘りたい｡日本人と中国人と台湾人の性格の違いがわかって､多文化共生で協力し合うことを職場で生かしたい。

〈運営スタッフアンケート〉

◆アンケート実施結果

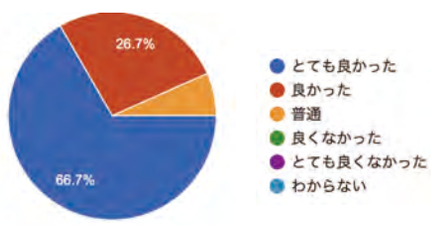
運営スタッフの主な仕事は展覧会会期中の受付・看視、また展示会場の設営補助だった。運営スタッフの参加について、「とても良かった」「良かった」が合わせて６割以上となり、参加学生にとって良い学びの機会になったことがわかる。主な肯定的な意見としては、「先輩との交流があった」「展覧会運営を経験できた、運営において気付きがたくさんあった」というものが多かった。特に展覧会づくりに初めて関わる学生にとっては、実際の細かい作業や打ち合わせなどが新鮮な学びとなった。

一方、改善点としては「シフトの時間の長さ」「運営スタッフ同士のコミュニケーションの場の少なさ」が挙げられた。「運営スタッフ」は募集締め切り後でも希望する人を受け入れる方針だったため、スタッフの顔合わせ後から参加した学生にとって交流の場が無かったことは事実である。会期中の運営に関して準備不足だったため、運営を任せる「運営スタッフ」に細かなケアが出来なかったことが反省点として挙げられる。

学生にとっての学びという観点では目的を達成できたと言えるが、人員配置やスタッフマネジメントの面ではやや課題が残った。

〈参照〉運営スタッフアンケート ※一部省略

①運営スタッフに参加してみてどうでしたか？



②上記回答の理由を具体的に教えてください。

・展示の方法はもちろん、先輩がこだわった点を近くで見聞きできたのがとてもいい経験でした。また、同級生だけでなく先輩とも交流を深めることができたので、より芸文の雰囲気を知ることができたと思います。

・授業でもできなかったところを多く見ることができたから。

・授業ではできない実践的なことが学べたから。またこの状況下の中で、さまざまな人との繋がりや人と関わることの大切さ、作品との関わり方を学べたから。

・初めての経験ではありましたが、私にもやれることはたくさんありました。実際に行えない作業でも、先輩方の様子を見て学ぶことができましたし、実際に作業する中での学びも多くありました。

・展示について触れられたことや、実際の作家さんと共に活動できたことが貴重な経験でした。また、コロナ下での展覧会の在り方を、どこか傍観していたところがあったのですが、実際にプロジェクトに関わったことで、事の重大さに気付きました。とにかく気付きばかりでした。

・先輩と沢山お話ができ、運営に関することを教えてくださったので、大変参考になりました。また、作家さんと関わることができたのも非常に貴重な体験でした。

・展覧会を運営していく上で大事な心がけを学ぶことできたため。

・最後の中締めのときに、中屋敷さんからいただいた金の穂のサイン入りの画集を見たときに、こんなに直接的に強烈に、自分のやってきたことに感謝されたことが初めてで、嬉しかったからです。

・間近で展覧会の運営を見る、そして自分自身も開く側に立つという当初の目的が達成されたから。アーティストの方々ともお話しできたりお心がけくださったりと、本当に貴重な機会を得られたから。また、新型コロナウイルスの影響もあり、同学年もそうだが違う学年との関わりも薄くなってしまっていたので、芸文の学生と関わることができ嬉しかったから。

・初めての展覧会運営スタッフに参加できたということ、そして何より、歩く展に関わる全ての人と出会えたことが私にとっては財産となりました。その意味で、今回の運営スタッフへの参加は私にとって「とても良かった」と言えるものとなりそうです。

・展覧会の運営の仕組みを知ることができたからです。鑑賞者の立場から展覧会をつくる裏の立場になれたことがとても良い経験になったと思います。また、先生方や先輩方や同級生と話すことができたことはとても嬉しかったです。
・内側から展覧会運営に関わることで得られる経験や知識が多かったです。表面的には見えない問題が展覧会の内部では多く起こり、常に改善が行われていることが分かりました。また、知識や経験だけでなく、それによる人との繋がりが生まれたことも良かったと思います。
・参加のきっかけでも述べたが、展覧会運営の基礎的な部分を見ることができ、少しだけだが実際に体験することができて良かった。先輩方と交流する機会にもなり、さまざまな学びを得ることができた。
・初めての看視員の経験をつむことができた。実際自分の時間との折り合いの大変さに苦労したが、参加して得たものも大きいように思う。自分が参加すると決めたことを途中で投げ出したりしたくはないので、シフトに入ったり要請に時々参加したが、自分の予定との折り合いが難しかったように思う。

③AGP2021 に参加して学んだことを教えてください。
・展示台の塗り直しや窓の紐を隠す等、展覧会を開くにはとても細かいことまで気を配る必要があるということを実感しました。作品を預かりお客様を招く責任の重さを感じました。また、大学生活において、シフトの確認等自己管理が必須だということが身に染みました。
・展示をする、ということは想像以上に大変であるということ。また実際にやってみないとわからないこと、現場にいる人と指示する人とで感じることは違うこと。その技術や様々なものの価値について知らないということがいかに怖いかを学びました。
・細かいところまでこだわり抜くことの大切さ、ほうれんそうかくの重要性、設営運営撤去の作業についてなど。
・プロジェクトを良いものにするには、顔を直接見て話したりすることが本当に大事だなと思いました。また、何事も試しにやってみたり、試したりすることが大事であることも学びました。
・作家さんやスタッフ内のコミュニケーションを大事にすることで、作業を円滑に進められるようになるということ。
・展覧会の受付業務にのぞむ姿勢について考えさせられました。3 時間シフトが入っていたときに、途中お客さんが来ず、暇になり本を取り出し没頭してしまったのですが、杉浦先生が通りかかり、「読書もいいけど、私ならこういう時間に展覧会のために次にどのようなことができるのか考える」といったようなことを言われたときに、はあっとさせられました。そこからは、受付や感想台の上の物の並びを整えたり、感想の足跡を読んでみたりと、展覧会にもっと寄り添えるように空いた時間も考えるようになりました。
・コミュニケーションの大切さを学びました。様々な異なる種類のお仕事や作業があるとは思うのですが、それも突き詰めていけば全てコミュニケーションにつながっていくのではないか、あるいはコミュニケーションなしにはそれらは語れないのではないかと強く感じました。自分では些細なことと感じるようなことでも、展覧会全体、あるいはそれに関わる別の立場の誰かにとっては重要なことであるような場面もたくさんあるのだと思います。展覧会を運営することや多くの人と協力しながら一つのものを作り上げるということは、常にそこに関わるあらゆる人々の気持ちや意見、状況等に気を配って、想像して、一つ一つ丁寧に積み上げることなのだと知りました。
・展覧会は会期中にも進化を遂げていくことを学びました。スタッフ同士の情報交換が非常に大切だとわかりました。
・展覧会運営に必要な役割やツール、進め方を学ぶことができました。展覧会が成立するために、数多くの企画や人員が必要になってくることも分かりました。
・展覧会を運営する中で、さまざまな問題が起きたり、新たな視点を発掘することができたり、色々な物事が展開していくことが、大変ではあるけれど経験値が上がると感じた。また、展覧会を運営する際に必要な裏方がどのようなことをしているのか、実際に知ることができて良かった。

④運営スタッフの活動内容について、改善点があれば教えてください

・運営スタッフの人数はそこそこいたとは思うのですが、それでも受付シフトに誰も入れないというような事態が発生してもおかしくない状況でした。10:30~1 時間単位でのシフトでしたが、授業の開始・終了時間に合わせるともう少し状況は緩和されたのではないかと思います。
・先輩方が沢山お話をしてくださり、色々教えてくださったのですが、授業から歩く展が開催されるまでのプロセスをもう少し知りたかったです。
・同じ運営スタッフの中でも、有志とはいえ仕事量やシフトにやや偏りがあったのかな？と思いました。
・改善点は現状特に思いつきません。私としては、運営スタッフとして関わらせていただける一方で、そこにおける強制力のようなものはほとんど感じることなく、あくまで自分のペースでスタッフとして参加することができたと感じています。例えば受付のシフト等で急な変更があった場合なども少なからずあったとは思いますが、それも言ってしまえばお互い様で、スタッフ同士が補い合っていけば良いものだと思いますので、それほど大きな問題ではなかったと感じています。
・運営スタッフの中でも、あまり顔を合わせたことのない人もいたので、より親交を深めることのできるような活動があればもっと展覧会に活力が出るように思いました。
・ネーミングとして冠する「運営」。どの程度「運営」する立場に立てていたのか私にはわからない。深く関わって行こうと思えばできたかもしれないが、コアスタッフと運営（ボランティア）スタッフにはやはり隔たりがある。私自身も深く関わっていきたい思いもありつつ、自分のやるべき他のことを投げ打ってでも関わることは避けようという防衛本能が作動した。学びたいという意欲のある人に対して機械的な仕事しか振らないのもなんだか酷な気がするが、何かしらの明確な線引きが欲しいかもしれない。依頼主と受けては相互関係にあるので難しいと思うが。
・1 年だったのでまだ教室のことなどあまりよくわかっていなかったのでもう少しマニュアルを細かくしていただきたかったです。

⑤AGP2021 の経験を今後どのように活かしていきたと思いますか？

・まず、2 年の展示基礎の授業で今回の経験を生かしてさらに深く学びたいです。3.4 年で行う AGP(GGP) では、今回の経験を生かし、より主体的に動きたいです。また、コアスタッフとして後輩を引っ張っていける先輩になりたいです！
・計画段階、実行するにあたっての下準備、何かを起こすためのやりとりについて忘れることはない。
・ただ展示された作品を見るのではなく、そこにはどんな工夫がされているのか想像できるようになりたいです。
・もうすでに活きています！講義だけではなく、普段の生活でちょっとした企画をするときなど、実際にプロジェクトで効率の良い動きをする先輩方をみたことで、容量が良くなりました！展示だけではなく、今後の自分を組み立てるプロセスとして、この経験を使っていきたい。
・これから GGP2021 も大詰めの時期になってくると思うので、経験したことを活かしてアウトプットしたいです。これから参加するプロジェクトにも活かしていけたらと思います。非常に良い経験をありがとうございました。
・展覧会やアートプロジェクトを運営する際、役割の分担やするべきことを実践的に理解できたので、それを活かしたい。また、実際に展示作業などを行う人だけではなく、協力してくださる全ての人が作りあげるものだと忘れないようにしたい。
・AGP の活動は私にとって、ある種言葉通り原点・出発点のようなものです。主要メンバーとして何か重要なポジションについていたとか、たくさんの時間を使って知恵も使ってというようなことはありませんでしたが、今回のように、展覧会の「普段は見えない部分」を見たのは初めてだったという意味において、です。そしてそれは私にとってこれから先も変わらない事実だと思いますし、だからこそ大切な思い出です。細かい学びや気づきは本当にたくさんありました。しかしそれ以上に私にとって大切だったことは、初めは何が何だかよくわからなかったけれど、この AGP2021 に飛び込んでみた、そしてそれを受け入れていただいた、ということそれ自体だったのかなと今は思います。
・直近では、GGP2021 の運営で活かせると思った。さまざまなトラブルへの対応方法や、運営することの経験を少しだけでも今回知ることができたので、新たな挑戦をしていくことができると感じた。それ以上に、今後仕事をする際に、自分がやるべきことや社会人としてのマナーを知ることができた。

09 今後の活動

◆巡回展の開催（2022.2.15-3.15）
展覧会が好評を博したことから、来年２月〜3 月に京都のギャラリー「ギャルリー宮脇」にて巡回展の開催を予定。中屋敷智生の活動拠点である京都での開催は、新たな反応や繋がりを生む「コトづくり」となる。

◆齊藤彩、中屋敷智生２人展開催
日本で最も歴史のある日動画廊 コンテンポラリーアート (nca）にて、齊藤彩と中屋敷智生の２人展の開催が決定。「歩く」展が、nca ディレクター 岩瀬幸子氏と２人のアーティストを繋ぐ場となった。

◆中屋敷智生、台湾のアートフェア「ART 台北」に作品出品
展覧会関連イベントとして実施した「中国語ツアー」をきっかけに、台湾のギャラリー「YIRI ARTS」から、台湾のアートフェア「ART 台北」に作品出品することが決定。
学生メンバーのうち中国、台湾からの留学生が中心となって行った「中国語ツアー」が、アーティストの活動の場を広げるきっかけの１つとなった。

◆京都精華大学芸術学部のオンライン授業に参加
京都精華大学芸術学部の吉岡恵美子先生に、本活動に興味を持っていただき、吉岡先生の授業「現代アートプロジェクト演習」にて学生メンバーが活動について話をした。学生から展示班のチェン、教育プログラム班の白土が代表として話し、キュレーションやアートマネジメント を学ぶ学生同士がお互いに良い刺激を受ける機会となった。

◆地域との繋がり
本展の会期中に緊急事態宣言が発令されたため、目的の１つであった小平地域の人々の来場・交流を充分に実現することができなかった。
しかし、展覧会会期初期には地域の方と思われる幅広い世代の方々にご来場いただき、また小平市報の「歩く」展記事を見た方から問い合わせがある、来場希望の方から個別にご連絡を頂き特別措置をとって入場していただくなど、小平地域からの嬉しい反応があった。
今後も継続的にアプローチを続けることで、より地域に大学を開いていける可能性がある。

Artists and Geibun Project 2021 歩く - 感覚と思考の交差点 -
事業報告書

作成日
2021 年 7 月 21 日

作成
Artists and Geibun Project 2021　鈴木 颯良